

平成 27 年度指定
スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書
第 5 年次



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL



令和 2 年 3 月
大阪府立豊中高等学校

巻 頭 言

校長 平野 裕一

本校は、大正10年に大阪府立第十三中学校として創立され、今年度創立98年を迎える大阪府内有数の伝統校です。この間、文武両道の伝統の下、社会で重要な役割を果たす人材を輩出してきました。平成23年4月に、大阪府教育委員会よりGLHS（グローバル・リーダーズ・ハイスクール）に指定され、将来国際舞台で活躍する人材育成をめざしています。また、平成27年度にSGHの指定を受けて以来、『多様性』と『文化』を掛け橋にして世界を牽引する人材を育成する」ことを研究開発構想に掲げ研究を進め、今年度はその最終年度に当たります。

SGH事業に取り組んだこの5年間を振り返りますと、本校の生徒はもとより、教職員に対しても大きな影響をもたらし、先進的な研究成果を残すことができたと自負しております。

1点目は、アンケート等から得られたデータをもとに考察を行い、次年度の実践にむけて工夫・改善案を実施計画に盛り込み実行し、再び検討を重ねるというエビデンスベースのカリキュラムマネジメントが実施できたという点です。

2点目は、海外や国内の外部機関と有機的に連携することにより、英語運用力が着実に伸び、「課題研究」を中心とした社会に開かれた教育活動が定着し、思考力・判断力の育成はもとより、学びに向かう力・人間性の涵養に資することができたという点です。

3点目は、高大接続改革における大学入試での多面的・総合的評価が求められる中で、SGHでの「課題研究」の研究成果が評価されるAO・推薦入試により大学に進学する生徒が増加した点です。

本校は今年度からWWLの連携校に指定されており、これまで取り組んだSGH事業の成果を基盤としてさらなる研究に取り組んで参ります。

結びとなりますが、SGH事業実施につきましては多くの方々のご協力とご支援により進めていくことができました。文部科学省の皆様、大阪府教育委員会の皆様、運営指導委員会の皆様には多大なご指導をいただきました。また、大学関係者の皆様、豊中市教育委員会、各種研究機関や企業、NPOの皆様にもお世話になりました。ここに厚くお礼申し上げますとともに、今後なお一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

目 次

巻頭言

第 1 部 令和元年度 S G H 研究開発完了報告

S G H 研究開発完了報告書（別紙様式 3）	1
-------------------------------	---

第 2 部 S G H 研究開発の成果と課題

令和元年度 S G H 事業の成果.....	23
令和元年度 S G H 事業のまとめ.....	34

第 3 部 S G H 各活動実施報告

第 1 章 課題研究

第 1 節 課題研究基礎.....	35
第 2 節 SG 課題研究 I	42
第 1 項 GLOBAL VISION 目的 1	43
第 2 項 GLOBAL VISION 目的 2	48
第 3 項 GLOBAL VISION 目的 3	53
第 4 項 GLOBAL VISION 目的 4	59
第 3 節 SG 課題研究 II	64

第 2 章 スーパーグローバルセミナー（S G S）

事業の概要・成果・今後の課題.....	69
---------------------	----

第 3 章 豊高グローバルスタディーズ

事業の概要・成果・今後の課題.....	73
---------------------	----

第 4 章 海外・国内フィールドワーク・英国語学研修

事業の概要・成果・今後の課題.....	75
---------------------	----

第 5 章 S G H ・生徒研究発表会

事業の概要・成果・今後の課題.....	87
---------------------	----

第4部 課題研究生徒成果物

第1章 課題研究基礎成果物..... 90

第2章 SG 課題研究Ⅰ成果物

課題研究テーマ一覧..... 93

個人論文

SNSを使って若者にフェアトレードを広める..... 95

公共施設における再生可能エネルギーの導入と節電についての考察..... 101

フードピクト利用によるヴィーガンレストランの
ムスリムフレンドリー化..... 106

訪日ムスリムのお土産の選択肢を増やすための提案..... 111

在日ムスリムの埋葬と日本人の理解の拡大方法の検証..... 115

日本人とムスリムの相互理解のために..... 118

国際結婚における価値観の違いの研究..... 121

第3章 SG 課題研究Ⅱ成果物

2年次作成論文と3年次作成論文の比較..... 126

第5部 関係資料

関係資料1 教育課程表（74期、73期、72期）..... 137

関係資料2 運営指導委員会議事録..... 140

関係資料3 ルーブリック・アンケート..... 144

第1部 令和元年度 SGH 研究開発完了報告書

別紙様式3のとおり、大阪府教育委員会教育長より、文部科学省初等中等教育局長宛に研究開発完了報告を行った。

(別紙様式3)

令和2年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 大阪市中央区大手前2丁目
管理機関名 大阪府教育委員会
代表者名 教育長 酒井 隆行 印

令和元年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成31年4月1日（契約締結日）～令和2年3月31日

2 指定校名

学校名 大阪府立豊中高等学校

学校長名 平野 裕一

3 研究開発名

「多様性」と「文化」を掛け橋にして世界を牽引する人材を育成する。

4 研究開発概要

指定5年めの最終年度にあたり、生徒の世界への関心や研究への意欲、学習に対する興味をさらに高めることを主たる目標に掲げ、校内はもとより、国内外で組織的に研究活動に取り組んだ。インドネシアでの海外フィールドワークでは、調査研究、Budi Mulia Dua International School との研究交流などを行い、国内においては大阪大学などを訪問して調査を行うとともに、大阪府立豊中高等学校能勢分校、宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校と研究交流を実施した。また、グローバル社会において不可欠な英語を用い、論理的に物事を主張する能力をさらに高められるよう、即興型英語ディベート講座を実施するとともに、ロジカルシンキング・表現力コミュニケーション能力向上講座を短期集中型で実施した。その結果、JICA エッセイコンテストで独立行政法人国際協力機構関西センター所長賞1作品と学校賞を受賞、関西学院大学 SGH 入試で4名、大阪大学 A0 推薦入試で1名が合格するなど成果が顕著に現れた。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①英語教育支援												→
②海外研修支援												→
③運営指導委員会						○					○	
④成果の還元普及											→	
⑤指導助言												→

(2) 実績の説明

①英語教育支援

英語ネイティブ講師を複数名配置し、英語教育を支援。また英語 4 技能の向上のために、卓越した英語力を有する教諭を配置。TOEFLiBT を扱った授業を推進し、海外への進学が可能となるよう支援している。

②海外研修支援

アメリカ・サンフランシスコでの研修（府教育庁主催）

7月25日（木）～8月2日（金）

豊かな感性と幅広い教養を身に付けた、社会に貢献する志を持つ、知識の重要性が一層増すグローバル社会をリードする人材を育成するため、グローバルリーダーズハイスクール（GLHS）の代表生徒を海外の大学へ派遣し、教育・文化交流活動を通じて、国際社会に貢献できる真のリーダーとしての資質の向上と国際性の涵養を図る。

③運営指導委員会

2回（9/27、2/5）実施。課題研究発表会と同日実施とし、生徒への指導助言を含め、指導の在り方についての協議を行った。詳細は以下の通り。

【運営指導委員】

高坂敬三	色川法律事務所	顧問
加堂裕規	元関西外国語大学短期大学部教授	
大津真作	甲南大学名誉教授	
北條尚子	日本貿易機構（ジェトロ）横浜	所長
安威守人	ライジングサン代表取締役	
山口勝久	大阪府教育センター	高等学校教育推進室 指導主事
小山田敏	大阪府教育センター	高等学校教育推進室 指導主事

第1回運営指導委員会

- ・事業指定当初から比べると徐々に成果があがっており実践的になっている。
- ・指導のノウハウが確立し、成果の質的向上が見られる。
- ・研究内容がビジネスモデルに近づいてきている。

第2回運営指導委員会

- ・研究が多様になっている一方で、これまでの先輩の研究の蓄積が見られる。
- ・研究の水準が高まり、課題の独自性が増している。
- ・中間発表に比べて研究が深化しており、自分自身の言葉で話すことができている。
- ・生徒自身が発表できる自信を持てるような指導が必要。

④成果の普及還元

SGH 指定校と同様に課題研究に取り組む高校や、グローバル人材の育成や海外進学に関心の高い高校を中心に、ブログなどを通じて SGH に係る活動状況や情報を発信した。また、2月8日（土）（場所：大阪大学コンベンションホール）に、府教育庁が主催するグローバルリーダーズハイスクール（GLHS）合同発表会で SGH の研究成果を生徒が発表。発表に対しては評価に用いるループリックを府教育庁が作成し、課題研究の質の向上を図り、その成果の普及還元に努めた。

⑤指導助言

担当課の複数の指導主事が、授業や研究実践への関わり、また次年度の計画の作成、報告書作成など、指導助言を通年にわたって行った。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①学校設定科目「課題研究基礎」「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅱ」の実施												→
②TOYONAKA グローバルプログラム												→
③教科連携プログラム												→
④大学・企業との連携												→
⑤海外フィールドワーク										○		→
⑥国内フィールドワーク												○
⑦スーパーグローバルセミナー		○	○	○								
⑧豊高グローバルスタディーズ												→
⑨運営指導委員会の開催・事業の評価						○					○	
⑩成果の公表・普及						○					○	→
⑪報告書の作成											○	○

(2) 実績の説明

①学校設定科目「課題研究基礎」「SG 課題研究Ⅰ」「SG 課題研究Ⅱ」の実施

①「課題研究Ⅰ」 クラスごとの授業 第1学年 文理学科 360名対象

第1学年360名全員を対象に、クラスごとに情報科の教諭が担当した。「課題研究の手法と英語を用いたプレゼンテーションをとおして、2年次の課題研究Ⅰにおける本格的な探究を行うことのできる人材の育成」を目的とし、今年度は1学期から「SDGsに関わる提案」もしくは「家庭でできる自由研究」のどちらか一方を選び、班単位での研究を行わせた。

②「SG 課題研究Ⅱ」金曜6・7限授業 第2学年 文理学科 SGH コース 150名対象

「課題研究基礎」の学習を発展させ、次の4観点から研究を進めた。

VISION 1: 「フェアトレード」で生産者の立場に立つビジネスを展開する

VISION 2: 「地球環境問題（再生可能エネルギーの活用）」を学び、生活者の立場からのビジネスを展開する

VISION 3: 日本とイスラーム諸国の探究から、イスラーム社会へのソーシャル・ビジネス・プランを提案する

VISION 4: 日本とイスラームから創造する新たなスタンダードー 比較文化的観点からのビジネス提案ー

今年度から2学年全員が文理学科になったことから、対象生徒数が昨年度に比べ倍増した。各班とも、関係企業・施設の訪問や関係自治体への訪問、大学教授から指導助言をもらう等のフィールドワークを積極的に行い、それらの研究成果を、9月の中間発表会、2月のSGH 課題研究発表会において口頭発表・ポスター発表形式でプレゼンテーションを行った。また、個人の取組みとして論文(A4サイズで3枚以上)という形で成果をまとめた。

GLOBAL VISION	目的 1	目的 2	目的 3	目的 4
実施概要	・新たなフェアトレードビジネスモデルの構築・企業への提案 ・実店舗と連携した、フェアトレード商品販売促進方法をプロデュース ・実際にフェアトレード商品を仕入れ、販売	・世界各国のエネルギー事情や政策についての学習や情報収集 ・地域活性化の研究（京都嵐山） ・発電に携わる企業と連携し、発電施設を見学 ・遠隔授業システムを用いた能勢高校との研究発表・交流	・トルコ以外のイスラーム諸国を対象を拡大 ・イスラーム諸国の歴史的・文化的・社会的過程についての研究 ・モスクやイスラーム関係団体・企業へフィールドワークの実施 ・遠隔授業システムを用いた JICA 東京職員との研究発表・交流	・企業と連携し、在日ムスリムが日本社会で快適に勤務できる環境について提案 ・イスラーム諸国の衣食住、文芸等の諸文化について調べ、イスラーム諸国出身者や連携大学の留学生等からも情報を収集 ・日本文化との共通性・相違性を整理し、イスラーム諸国の人間観・社会関係観 ・遠隔授業システムを用いた JICA 東京職員との研究発表交流
各班の研究テーマ	① フェアトレード商品購買意欲促進の工夫② SNS を使って若者にフェアトレードを広める③ イベント出店でフェアトレード普及実践を行うーサヨナラフェアトレードー④ マップによるエシカル消費の普及	① 観光地におけるゴミのポイ捨ての減少② 公共施設における自然エネルギーの導入について③ 洋上風力発電の有益性について④ 原子力の未来	① フードピクト利用によるヴィーガンレストランのムスリムフレンドリー化② ムスリムの人々がより日本で観光を楽しむために③ 訪日ムスリムのお土産の選択肢を増やすための提案④ ムスリムがテーマパークを楽しめるようにするために⑤ コーヒーでイエメンを救う⑥ 日本のムスリム観光客を増やそう⑦ ムスリム留学生が日本で快適な生活を送れるようにするために⑧ ムスリム留学生が便利に買い物をするために⑨ UAE 向けの和食のメニューを作ろう	① 在日ムスリムの埋葬と日本人の理解の拡大方法の検証② ムスリムが快適に働ける職場にするための検証③ イスラームのイメージを改善するためのイスラーム検定の草案作成④ ハラルフードを同世代の人たちに広めよう⑤ ムスリムの方が日本で困らないためには⑥ ハラルフードと教育⑦ お祭りを通して文化を理解する⑧ ムスリムに日本食を楽しんでもらうための方法の検証⑨ 訪日ムスリムのための礼拝マップ作成⑩ ムスリム対応する企業をムスリム留学生に紹介する方法の提案⑪ 日本人とムスリムの相互理解のために⑫ ムスリムが快適に日本で過ごすために⑬ 誰もが偏見をなくせる世界なのに⑭ 物語で伝えるイスラーム⑮ ムスリムの国際結婚のハードルを下げる⑯ イスラーム諸国の女性観⑰ ググってコーラン
主な訪問先	・シサム工房 もりのみやキューズモール店、エスパーロ能勢、神戸大学国際協力団体 NGO 『PEPUP』、「54CLOSET」	・関西電力株式会社大飯原子力発電所、大阪府咲洲庁舎、京都嵐山保勝会、豊中市立東豊台小学校、京都嵐山「竹林の小径」	・ Washoku Home Cooking Machiko、株式会社ミヤコ国際ツーリスト、茨木モスク、大阪イスラミックセンター、レンタル着物店夢館五条店、株式会社坂ノ途中、神戸モスク、エイエイエスケータリング、パブリカ食堂、大阪大学国際交流サークル B. S. P.、株式会社ローソン大阪大学豊中キャンパス店	・ Washoku Home Cooking Machiko、アリーズキッチン、NPO 法人「日本ハラル協会」、日本食レストラン「祭」、ヤンマー株式会社本社、神戸モスク、茨木モスク、アムネスティ・インターナショナル大阪支部、エースコック株式会社、大阪大学 国際交流サークル B. S. P.、ハラルジャパン、
主な連携先	・一般社団法人日本フェアトレードフォーラム代表理事 小吹岳志氏による講義 ・神戸大学 NGO 団体 PEPUP より 5 月に JICA 関西で行われるイベントへの出展・参加依頼	・関西電力株式会社大阪支社統括グループ新山直樹・田中一憲・西村正子氏による指導・助言 ・大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学科北田孝典教授による学問的指導・助言	・とよなか国際交流協会事業主任職員山根 絵美氏による指導・助言 ・神戸大学国際教育総合センター黒田千晴准教授による学問的指導・助言	・元関西学院大学総合政策学部高畑由起夫氏による学問的指導・助言 ・NPO 法人「日本ハラル協会」会長レモン史視氏による専門的指導・助言

③「課題研究Ⅲ」月曜7限授業 第3学年 文理学科 SGH コース 82名対象

SG 課題研究Ⅱで文章作法や論文作法などの、いわゆるアカデミック・ライティングを学んだのち、2年次のSG 課題研究Ⅰで書いた論文のブラッシュアップを行った。「課題研究」を利用した推薦入試を希望する生徒はさらなる研究活動を行い、課題研究の成果を活用して関西学院大学の「SGH 対象公募推薦入学試験」を5名が受験、うち4名が合格、大阪大学のA0入試に1名が合格した。

2 TOYONAKA グローバルプログラムの実施

①7月11日(水)、第1学年全員360名対象に大阪大学 理事・副学長 小林傳司氏より「学ぶことの意味：何のために、誰のために？」をテーマとした講演会を実施した。

②1月17日(金)、第1学年360名を対象とした大阪大学留学生との交流会を行い、ワークショッププログラム(大阪大学留学生51名との交流会)を実施した。

③12月13日(金)、遠隔操作システム(スモースペース)を使用したJICA 東京職員との交流を行った。

3 教科連携プログラム等

①4技能統合型の英語力養成

- ・TOEFL 仕様の授業(第3各学年文理学科約80名対象)
- ・総合英語(第1学年文理学科360名対象)
- ・異文化理解(第2学年文理学科360名対象)
- ・英語理解(第3学年文理学科160名対象)
- ・コミュニケーション英語Ⅲ(第3学年普通科240名対象)

②グローバルな視点に立った教養及び分析力の養成

- ・イスラーム文化の探究 : 国語総合(第1・第2学年720名対象)
- ・イスラーム社会・歴史の探究 : 現代社会(第1学年360名対象)
- : 世界史A・B(第2学年360名対象)
- : 地理A・B(第2学年選択者272名対象)
- ・イスラームの衣食住の探究 : 家庭基礎(第1学年360名対象)

4 大学・企業との連携等(一部抜粋)

① 土曜日年6回 大阪市立大学大学院 非常勤講師 江口雅祥氏によるロジカルシンキング講座、京都光華女子大学短期大学部教授 鹿島我氏及び株式会社BHF 代表取締役 広瀬大輔氏及び岡山大学全学教育・学生支援機構准教授 原田新氏による表現力・コミュニケーション能力向上講座
大阪府立大学工学研究科准教授 中川智皓 氏指導の即興型ディベート

② 6月14日(金) 一般社団法人日本フェアトレードフォーラム代表理事 小吹岳志氏

③ 6月7日(金) 関西電力株式会社大阪支社統括グループ
新山直樹・田中一憲・西村正子氏

④ 6月14日(金) 元関西学院大学総合政策学部教授 高畑由起夫 氏

⑤ 8月19日(月) 神戸大学国際教育総合センター准教授 黒田千晴 氏

⑥ 8月19日(月) 大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学科教授 北田孝典氏

5 海外フィールドワーク

SGH インドネシアフィールドワーク

<目的>イスラームに関する調査活動及び研究発表交流、文化交流

<内容>

- ・フェアトレードに関する学習、見学

APIKRI(手工業組合)と協力関係のある村への訪問・視察・体験学習

・現地高校との交流・文化紹介・発表・学校附属モスクの見学

Budi Mulia Dua International School との交流・文化紹介・発表

<実施日> 令和2年1月4日(土)～1月7日(火)

<参加者> 本校第1学年生徒4名、第2学年生徒6名(女子10名)

6 国内フィールドワーク

<目的・内容>

・熊本市内でのフィールドワーク

フェアトレードタウン推進団体、熊本市国際交流会館に話を伺う。行政と民間の活動とで地域を盛り上げていこうとする実例を学ぶ予定。

・小水力発電についてのヒアリング

五ヶ瀬自然エネルギー研究所所長の石井勇氏から助言をいただく。

・五ヶ瀬中等教育学校

3月6日(金)の五ヶ瀬中等教育学校発表会「グローバルフォレストピア調査研究発表会」のリハーサルを見学した後、生徒同士の交流を実施し、相互の課題研究の特色についてディスカッションする予定。

<実施日> 令和2年3月5日(木)～3月6日(金)

<参加者> 第1学年生徒15名、第2年生徒2名

7 スーパーグローバルセミナー (SGS)

①第1、2学年生徒を対象に「英語ディベートセミナー」への参加を募り、次の6つの能力を養うために、1年間を通じて土曜午前に計6回実施した。

1. 英語での発信力	2. プレゼンテーション力	3. コミュニケーション力
4. 論理的思考力	5. 批判的思考力	6. 幅広い知識と教養

<参加者> 第1学年、第2学年合わせて81名

<事前学習> 豊高グローバルスタディーズメンバーによるディベートのルール説明及びディベート講座

<第1～6回>大阪府立大学工学研究科助教中川智皓氏指導による即興型英語ディベート。3～4名によるチームディベート中心。

②第1、2学年生徒を対象に「ロジカルシンキング講座・表現力・コミュニケーション能力向上講座」への参加を募り、論理的思考力、他者と協働して思考・判断・表現を深める対話力、自分の考えを発表する表現力を養うために、年間6回土曜日午前中に実施した。

<参加者> 第1学年、第2学年合わせて37名

<講師> [ロジカルシンキング講座; 3回] 大阪市立大学大学院 非常勤講師 江口雅祥氏
[表現力・コミュニケーション能力向上講座; 3回]

京都光華女子大学短期大学部教授 鹿島我氏

株式会社BHF 代表取締役 広瀬大輔氏

岡山大学全学教育・学生支援機構准教授 原田新氏

8 豊高グローバルスタディーズ

文理学科を始め普通科の生徒も含めた全生徒の中から、「豊高グローバルスタディーズ」生徒希望者を募り、第1学年から第3学年まで合わせて12名の生徒が平日の放課後に「即興型英語ディベート」、「英語でのプレゼンテーション」、「レシテーション(スピーチ暗唱)」、「4技能向上プログラム」、さらに外部プログラムに参加している。

令和元年4月と令和2年2月にそれぞれTOEFL Jr. STANDARDテストを実施し、英語力の変化を測定。ただし、TOEFL Jr. STANDARDテストは最低点600、最高点900と、伸びを測るには分かりにくいので、最低点0、最高点100に換算して測定を実施した。

スコア	4月	2月	増減
第1学年平均	59.1	70.8	+11.7
第2学年平均	72.6	87.5	+14.9

以上のように、両学年ともスコアアップが見られた。2年生は昨年度からの継続の効果もあり4月当初の平均点が高かった。

9 運営指導委員会の開催、事業の評価

SGH 中間発表会（令和元年9月実施）および SGH・課題研究発表会（令和2年2月実施）に合わせ、運営指導委員会が管理機関により開催され、事業の評価を行った。

10 成果の公表・普及

（1）SGH 生徒研究発表会 <課題研究Ⅰ SGH コース選択者（第2学年） 150名>

1) SGH 中間発表会：令和元年9月27日（金）14：00～16：00

<会場> 大阪府立豊中高等学校 視聴覚教室・社会科教室・多目的教室

<参加者> 運営指導委員6名、管理機関（大阪府教育委員会）1名、見学者6名

2) SGH・課題研究発表会：令和2年2月5日（水）13：30～16：00

<会場> 大阪府立豊中高等学校 体育館

<参加者> 運営指導委員5名、管理機関（大阪府教育委員会）1名、見学者2名

（2）広報等

<国内>・学校HPにSGHブログ専用バナーを設け、随時活動内容を掲載した。

・豊中市立 eMIRAIE 環境交流センター主催、「ESD セミナー食べて、学んで、体験できる！第3回ちゃんぷる屋台村」にポスター発表参加

<国外>・海外にも研究活動を広報するためSGHブログ英語版の作成・更新を行った。

（3）コンテストや発表会等への参加

1) JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテスト2019に第1学年360名全員が応募
独立行政法人国際協力機構関西センター所長賞1名・学校賞を受賞

2) 令和元年5月12日 JICA 関西において、国際協力イベント「モノを通して見る、よりよい世界」にフェアトレードの普及・実践団体パネリストとして参加

3) 令和元年12月 第7回高校生ビジネスプラングランプリ ベスト20（セミファイナリスト）及びベスト100に選出

4) 令和元年12月22日（日）SGH 全国高校生フォーラム（東京国際フォーラム）出場

5) 令和元年12月21日（土）・22日（日）PDA 高校生即興型英語ディベート全国大会（東京大学）出場（2勝2敗）

6) 令和2年2月1日（土）WWL フォーラム（拠点校：大阪府立北野高校）に、VISION4「お祭りを通して文化を理解する」班がポスター発表参加

7) 令和2年2月8日（土）グローバルリーダーズハイスクール（GLHS）合同発表会（大阪大学）に、VISION1「イベント出店でフェアトレード普及実践を行うーサヨナラフェアトレードー」班が発表

8) 令和2年3月21日（土）「WWL・SGH×探究甲子園」（関西学院大学）ポスター発表部門 VISION4「在日ムスリムの埋葬と日本人の理解の拡大方法の検証」班が出場

11 報告書の作成

SGH 研究開発報告書を作成し、SGH 指定校に配付する。

7 「目標の進捗状況、成果、評価」

（1）検証方法と評価方法について

本校のSGH事業に対する検証・評価に際しては、複数のデータを利用している。①「豊高型グローバルマインドセットに関するアンケート」、②「発表会後の振り返りワークシート」におけ

る選択式項目と自由記述欄を主な検証・評価材料とし、③その他にも TOEFL Jr. STANDARD テストの結果や、SGH 運営指導委員の指導・助言を活用してきた。最終年度である今年度は、①～③に加えて、本校教員を対象とした SGH アンケートと、関西学院大学との協定により実施した「高校生の国際関係についての考えや価値観などに関する調査」も検証の材料とした。

① 「豊高型グローバルマインドセットに関するアンケート」の分析と検証

生徒の資質向上の経年変化を把握するために、「豊高型グローバルマインドセット評価のルーブリック」をもとに、「豊高型グローバルマインドセットに関するアンケート」を作成し、分析・検証を行っている。複数の質問項目に答えることで、グローバルな視点や考え方、行動について 1 ポイントから 5 ポイントの 5 段階の数値で換算し、それらの平均値を取ることで、生徒の資質の変容を捉えることができるものである。検証結果については 8 「5 年間の研究開発を終えて」の（３）「生徒の変化について」において詳述する。

② 「発表会後の振り返りワークシート」の自由記述欄の分析と検証

毎年 10 月初旬の中間発表会後と 2 月初旬の課題研究発表会後の授業内で、「発表会後の振り返りワークシート」を使用し、個人の反省をもとに班での振り返りと各 VISION 内での反省を行っている。選択式項目と自由記述欄とに分かれているもので、中間評価のコメントを受けて、新たに生徒の自由記述欄の内容を「テキストマイニング」（使用ソフト KH Coder Ver. 3. alpha. 14b）の手法を用いて分析・検証することとした。検証結果については 8 の（３）において詳述する。

③ その他の検証・評価方法

TOEFL Jr. STANDARD テストの結果については 8 の（３）において、SGH 運営指導委員の指導・助言の内容については別冊の『SGH 研究開発実施報告書第 5 年次』において、本校教員を対象とした SGH アンケートの検証・評価については、8 の（４）「教師の変化について」において、「高校生の国際関係についての考えや価値観などに関する調査」の検証・評価については、8 の（３）において、それぞれ詳述する。

（２）中間評価後の改善・対応状況

指定 3 年めの平成 29 年に実施された SGH 中間評価において、本校は「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される」という、上から 2 番めの高評価を得た。以下はそのコメントである。

- 生徒の主体性を尊重し能動的な学習展開が見られる。海外研修でのフィールドワークも探究の課題に基づいて行われている点は高く評価できる。
- 教員相互の授業見学が実施され、課題研究の指導法は各教科・科目へアクティブ・ラーニングの取組みとして波及している点も高く評価できる。
- 「グローバルな社会問題を発見・解決できるコンピテンシーの習得」が目標となっているため、今後はその目標にどのくらい近づいているのかを示す分析が求められる。

そこで、中間評価後に明らかになった SGH 事業の課題として、① 海外との交流を深化させること、② 生徒の資質向上の経年変化を把握すること、③ グローバルな社会問題を発見・解決するために必要とされるコンピテンシーとはそもそも何であるかを具体化することの 3 つを設定し、SGH 事業に取り組んだ。

① 海外との交流を深化させるために

本課題については、8 の（１）「教育課程の研究開発の状況について」において詳述する。

② 生徒の資質向上の経年変化を把握するために

これまでの生徒の活動成果や SGH の事業実績の報告、担当教員の所見等に加えて、「豊高型グローバルマインドセットに関するアンケート」や「発表会後の振り返りワークシート」の分析等、数量的な検証を行うことに重点を置いた。これらの分析の結果については、8 の（３）において詳述する。

- ③ グローバルな社会問題を発見・解決するために必要とされるコンピテンシーとはそもそも何であるかを具体化するために

課題研究を実際に担当してきた教員を中心として議論を重ねた。同時に、「発表会後の振り返りワークシート」の自由記述欄のうち、課題研究成果発表会を終えた2年生が必要だと思う能力について分析・評価を行った。

最近では総合的な探究の時間の導入に伴い、探究活動等を通して育成すべき資質・能力についての議論が各所で行われるようになったが、本校では受験指導に重きを置く授業が展開されていた。ところが、SGH アソシエイト校に指定されると同時に文系の課題研究が始まり、担当教員自身が探究的な学習について、一から学んで課題研究の授業をこなすことが精いっぱいの状態から、実際に生徒の態度や反応、成長を見ながら、授業を改善・研究しようとする意欲・行動が見られる段階へと向上した。教員の意識改革が成功した要因は、隔週の SGH 会議と隔週の課題研究担当者会議、頻繁に行われる VISION 内会議を通して、授業の進捗や生徒の情報共有、課題研究・各種フィールドワーク・グローバルスタディーズの在り方に関する議論を積極的に実施できたからであるとする。また1年課題研究基礎において、SSH 研究開発委員と情報を共有し、連携を強化して事業を進められたことも SGH 事業が学校全体の取り組みへと発展することにつながった。この結果、本校生徒がグローバルな社会問題を発見・解決するために必要なコンピテンシーについて、課題研究の授業を通してどのように身に付けさせるか、またその習得をどう評価するのかについて積極的に議論するようになった。このような新たな視点で議論がなされるようになったことは教員間における大きな変化であり、5年間の SGH 研究開発があったからこそその成果である。これら教員の変容については、8の(4)において詳述する。

8 「5年間の研究開発を終えて」

(1) 教育課程の研究開発の状況について

① 教育課程の変遷

【資料1】5年間の文科教育課程

実施年度	第1学年	第2学年	第3学年	第3学年選択	
H23	※SS探究基礎(1)	※課題研究(1)			H21入学生
H24	※SS探究基礎(1)	課題研究(英語)(1)			H22入学生
H25	SS課題研究基礎(2)	課題研究(英語)(1)			H23入学生
H26	SS課題研究基礎Ⅰ(1)	課題研究(1)			H24入学生
H27	SS課題研究基礎Ⅰ(1)	SS課題研究基礎Ⅱ(1)、課題研究Ⅰ(1)			H25入学生
H28	SS課題研究基礎(1)	SS課題研究基礎Ⅱ(1)、課題研究Ⅰ(1)	課題研究Ⅱ(1)		H26入学生
H29	SS課題研究基礎(1)	SG課題研究Ⅰ(2)	課題研究Ⅱ(1)		H27入学生
H30	SS課題研究基礎(1)	SG課題研究Ⅰ(2)	SG課題研究Ⅱ(1)	※SG課題研究Ⅲ(1)	H28入学生
H31	課題研究Ⅰ(1)	SG課題研究Ⅰ(2)	SG課題研究Ⅱ(1)	※SG課題研究Ⅲ(1)	H29入学生
R2	課題研究Ⅰ(1)	SG課題研究Ⅱ(2)	SG課題研究Ⅱ(1)	※SG課題研究Ⅲ(1)	H30入学生
R3	未定	SG課題研究Ⅱ(2)	総合的な探究の時間(1) (校内名称:SG課題研究Ⅲ)	※SG課題研究発展(1)	H31入学生
R4	未定	未定	総合的な探究の時間(1) (校内名称:SG課題研究Ⅲ)	※SG課題研究発展(1)	R2入学生

(注) 括弧内の数字は単位数を表し、※印は選択科目を示す

本校は平成23年度から普通科に加えて文理学科を設置しており、平成26年度に SGH アソシエイト校になり、平成27年度に SGH 校に指定される以前から、教育課程に課題研究を設定し、探究的な活動を進めてきた。ここでは教育課程の変遷を(i)平成26年度入学生からの第2学年課題研究増単位、(ii)平成26年度入学生からの第3学年課題研究実施、(iii)令和元年度の現状、の3つの観点から述べる。

(i) 第2学年課題研究増単位

平成25年度入学生から第1学年で必修科目として課題研究基礎を行うことになったが、当初は第1学年に2単位、第2学年に1単位の設定であった。しかしこの体制では、生徒が基礎的な知識・技能を習得したとしても、第2学年に週1時間の授業では研究を深めることは難しいのではないかと、という議論があり、翌平成26年度(SGH アソシエイト校指定)入学生からは、第1学年

1 単位、第 2 学年 2 単位に変更し、第 1 学年で基礎的な事項を習得した後に、第 2 学年でテーマを決めた深い探究をするという枠組みができた。

(ii) 第 3 学年課題研究実施

平成 26 年度入学生からは第 3 学年でも課題研究を導入した。これは第 1 学年から第 3 学年まで一貫した指導を行うことを目的としており、3 年間を通じた主体的な活動をめざすものであった。平成 28、29 年度は第 2 学年で学んだことを土台とした発展的な教科学習を行っていたが、平成 30 年度からは第 2 学年で作成した個人論文をブラッシュアップするプログラムを開発している（詳細は後述）。

(iii) 令和元年度の現状

【資料 1】の通り、課題研究等授業は平成 26 年度入学生から現在と同じ単位数になっており、第 1 学年で基礎的な知識や技能を身に付けた後、第 2 学年で自ら課題を見つけて研究し、第 3 学年でその成果を生かす、という流れが作られている。ただし、SGH 指定当初の内容は学年ごとに行われている側面が強く、3 年間の学習目標が曖昧であるという課題を抱えていたため、SGH 指定 5 年間の中で改良を続けてきた。

第 1 学年の課題研究については、「課題研究の研究手法と英語を用いたプレゼンテーションをととして、2 年次の課題研究における本格的な探究を行うことのできる人材の育成」を目的として掲げ、第 1、第 2 学年の接続を図っている。1 学期は研究活動の基礎となるパソコン操作や情報の技能を身に付け、2 学期から探究活動の基礎を学び、最終的には 1 月に大阪大学の留学生に対して日本語と英語でポスター発表を行うことを目標にしている。

第 2 学年の課題研究ではフィールドワークを重視しつつ、班で設定した課題について研究活動を進め、2 月の課題研究発表会での成果発表と論文作成を行う。第 3 学年には自分の論文をもとに、論理的な文章を書くための技能を身につけ、論文を精査することを課している。このように第 1 学年から第 3 学年までをととして課題研究に必要な資質や技能を身に付けられるようなプログラムを設定している。

平成 30 年度入学生からは普通科が廃止され、課題研究の対象人数が学年全体（約 360 名）となり、上記プログラムの拡大や教員の負担軽減が必要となった。そのため、研究の骨子を可視化し、生徒自身で論理的な思考に基づいて研究を進めるための手助けとなるようなワークシートを作成している。また、相互評価などの活動を増やすことによって、自立した学び手として、生徒たち自身で研究の善し悪しを見抜く力を育てるように努めている（詳細は研究開発実施報告書第 3 部を参照のこと）。

以上のように、3 年間を通じた課題研究指導体制を構築することができたが、令和元年度は倍増した生徒（特に第 2 学年）の研究指導を行うことは想像以上の困難が伴い、指導が行き届かない例も見受けられた。今後も拡大した課題研究において生徒の研究を支えられるよう、ワークシートや指導体制を改良していく必要がある。

② 5 年間の実践

本校は SGH 指定時の構想調書において、以下のような研究開発計画・評価計画を立てていた。

平成 27 年度 ―グローバルな問題解決能力の育成―

平成 28 年度 ―課題研究の深化―

平成 29 年度 ―海外の生徒との共同研究の推進―

平成 30 年度 3 年間の取組みをふまえ、全国で応用可能なプログラムの開発

令和元年度 4 年間の取組みをふまえ、全国で応用可能なプログラムの普及

次ページの【資料 2】は本校 SGH 指定 5 年間における研究開発の経過をまとめたものである。ここでは特に、(i) 課題研究、(ii) 成果の普及について記述する。

(i) 課題研究の研究開発について

(a) 生徒主体のフィールドワーク

構想調書では、平成 28 年度に「課題研究の深化」を掲げていたが、課題研究の改良は 5 年間を通じて行ってきた。特に指定 1 年次の課題研究の結果から、生徒の意欲を高めるとともに研究の質を上げる方法として、フィールドワークや外部人材の活用が有効であると考え、次年度以降、より積極的に活用することとした。

【資料 2】SGH 事業 5 年間の変遷

指定	アソシエイト	第 1 年次	第 2 年次	第 3 年次	第 4 年次	第 5 年次
年度	H26	H27	H28	H29	H30	H31
課題研究（2 年）	文科課題研究 拡大	担当者ごとによる 指導の工夫	研究をまとめる共通の ワークシート作成		論理的な思考のための ワークシート開発	対象者が160名から 360名に
課題研究 フィールドワーク(FW)		主に教員が 設定したFW	FW先の多くを 生徒に決めさせる	FW計画書・報告書 様式作成	夏季休業中原則全員FW アポイントメント マニュアル作成	教員引率なしFW増える アポイントメント マニュアル改訂
国内フィールドワーク・ 他SGH校との連携		熊本・宮崎 訪問開始	五ヶ瀬中等教育学校 発表見学	五ヶ瀬交流(テレビ会議) 能勢交流(遠隔システム)	五ヶ瀬交流 能勢交流	能勢交流
外部への成果発表 (一部)			SGH甲子園・ マイプロジェクト アワード	企業での研究発表・ 英語パフォーマンス 甲子園ブレ・SGH甲子園	英語パフォーマンス 甲子園・SGH甲子園・ 高校生シンポジウム	SGH甲子園・ LOHASフェスタ ビジネスプラングランプリ
課題研究（1 年）	2 単位が 1 単位に	留学生交流会を 学年全体に拡大	2 月に講演会を 多数実施	SDG s を調べ学習の テーマに据える	対象者が160→360名に プログラムを開発	1学期から探究活動
課題研究（3 年）			3 年課題研究開始 発展的な学習		論文精査 プログラム開始	論文精査 プログラム改良
SGS（セミナー）			即興型英語ディベート 講座開始	ロジカルシンキング講座 を追加導入	ディベートとロジカルの 2本立てで行う	ロジカルシンキング+表 現力向上を図る講座を新 設
高大接続		関西学院大学 との連携			大阪大学教職実践演習 連携開始	大阪大学教職実践演習 プログラム改良
海外フィールドワーク		インドネシア 課題研究との連動	マレーシア 事前学習の充実化 成果のポスター発表	インドネシア 五ヶ瀬との事前学習 2年課題研究との接続	マレーシア JICEやOISCAの留学生 との事前交流会実施	インドネシア 課題研究手法を 1年生に伝達
組織体制		SGH研究開発 委員会発足		課題研究主担当者会議を 別途実施		情報共有を密にするため 課題研究担当者会議実施
成果の普及（発表会）	市民会館での 発表会開始	全班口頭発表・ SGHブログ 日・英開設	ポスター発表導入 能勢・渋谷高校招待	校内での発表会・ イスラームシンポジウム 開催	イスラームシンポジウム 開催	・JICA関西主催国際協力 イベントに参加 ・「ESDセミナー」に ポスター発表参加

指定 2 年次以降は、フィールドワークをより効果的なものにするため、生徒に早めに研究分野・内容を確定させ、生徒自身にフィールドワーク先を決めさせるように働きかけた。指定 3 年次には、それまで生徒各自でまとめていた研究の計画や報告を、研究計画書や研究報告書としてフォーマット化し、生徒が思考を整理しやすいよう工夫した。指定 4 年次には、それまで個別に行っていた、企業や団体への電話対応やメールの書き方指導をマニュアル化し、プリントを見ながら生徒自身で考え行動できるようにワークシートを作成した。

これらの体制づくりにより、生徒は意欲さえあればフィールドワークに行くことが可能になり、自ら 2 か所、3 か所に調査・インタビューに行く班も現れるようになった。ただし、フィールドワークの目的やインタビュー内容などは、研究内容に応じて、担当者による指導の中で絶えず精査していかなければならない。フィールドワークの目的が研究に合致するためには研究全体が論理的な構成である必要があり、その点を強化するため、4 年次以降は論理的な思考を促すようなワークシートを開発している。詳細は本校 SGH の研究開発実施報告書の第 3 部を参照されたい。

(b) 課題研究と連動させた海外フィールドワーク

本校は、SGH 中間評価で「海外研修でのフィールドワークも探究の課題に基づいて行われている点は高く評価できる」との評価を得ていた。指定 1 年次から課題研究の内容に基づいた海外フィールドワーク先を設定し、生徒ができるだけ広範な内容を学べるように、インドネシアとマレーシアの隔年で行ってきた。

指定 2 年次からは、課題研究とは別にフィールドワーク参加者で研究課題を設定し、訪問希望先を参加者から募るなど、生徒主体の海外フィールドワークになるよう工夫した。帰国後は学んだ内容をポスターにまとめ、課題研究発表会で海外フィールドワーク報告として発表させた。平成 29 年度には第 2 学年生徒が行っている研究について、第 1 学年生徒がインドネシアでアンケート調査を行うなど、上級生と下級生との連携を取ることもできた。

構想調査の段階では平成 29 年度から「海外の生徒との共同研究の推進」を行うと計画していたため、海外フィールドワーク先で訪問する高校や大学との共同研究を進めようとしたが、結果的に実現はしなかった。この課題については 8「5 年間の研究開発を終えて」の(6)「課題や問題点について」にて詳述する。

訪問先との共同研究は叶わなかったが、平成 29 年度からは事前学習で他の SGH 校や留学生との交流事業を導入することができた。平成 29 年度には、国内フィールドワークで第 1 年次から交流をしている、宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校とのテレビ会議を行った。本校も五ヶ瀬中等教育学校も小水力発電の研究を行っており、共にインドネシアにフィールドワークを行っていたが、訪問

時期が異なっていたため、先に訪問した高校がもう一方に対してフィールドワーク報告をする、というやり取りをすることができた。

また平成 30 年度には、一般財団法人日本国際協力センター(JICE)のプログラムで日本へ留学している学生が本校を訪問し、また公益財団法人オイスカ(OISCA)のプログラムの一環で大阪府立能勢高等学校(現豊中高等学校能勢分校)を訪問している学生と遠隔授業システムを用いて交流するなど、自分たちの研究調査を事前に海外からの留学生に聞いてもらう機会を設けることができた。これらの機会は、本校が継続して海外交流をやっていた実績により実現したといえる。これらの取組みを今後も継続していきたい。

(ii) 成果の普及について

SGH 事業の成果の普及は、発表会や報告書、リーフレット作成、ブログ開設などがあるが、ここでは校内の発表会の形式と外部への成果発表について述べる。

本校の課題研究発表会は、当初市民会館を借り切って行っており、小ホールでの全班口頭発表(指定 1 年次)やイベントスペースでのポスター発表(指定 2 年次)を行うなど工夫を重ねてきた。この時期に大阪府立渋谷高等学校や大阪府立能勢高等学校の招待発表を実現し、成果の普及に資する活動もあったが、予算の関係で継続性に難があると指摘されてきた。

指定 3 年次となる平成 29 年度からは校内での発表会となり、代表口頭発表とポスター発表を組み合わせることで、SSH と SGH の両方の発表会を同時に開催することが可能となった。この発表会は全校生徒だけではなく保護者や課題研究の外部指導者等にも開かれており、継続性のある発表会を行うことができるようになった。

海外との交流を含めた成果普及の場として、平成 30 年度からは「イスラーム・シンポジウム」を開催した。これは Islamic Science University of Malaysia の学生 20 名前後を本校に招き、課題研究の内容を発表するとともに、研究についての助言を得て、質問・交流を通じて研究内容を深め、具体的な提言の方向を見出すことを目的としたものである。イスラームについて研究をしている生徒が実際にムスリムの方と話す機会は大変貴重であり、成果発表の場である以上に、生徒にとって学ぶことの多いシンポジウムとなった。

(2) 高大接続の状況について

① 大阪大学公開講座(高校生対象)

SGH に指定された平成 27 年度から大阪大学と連携し、平日の放課後・長期休暇を利用し、大阪大学において大学の講義を受講し、かつ本校の単位として修得を認める大阪大学公開講座を行った。この講座を利用して単位を修得した生徒の数は、平成 27 年度は 7 人、平成 28 年度は 2 人、平成 29 年度は 0 人、平成 30 年度は 1 人であった。

② 大阪大学講演会

平成 28 年度より、毎年 7 月に第 1 学年 360 名で大阪大学へ訪問し、大阪大学学長または副学長による講演会を実施している。(令和元年度：大阪大学 理事・副学長 小林傳司氏によるテーマ「学ぶことの意味：何のために、誰のために?」)1 年生の早い時期に「学ぶこと」についての意味に一度考えてみる機会を設け、その後の学習に対しての動機づけを行うとともに、大学進学への意識を高めることを目的として行っている。当初は学長または副学長の講演のみであったが、本校の卒業生で大阪大学に在学している学生にも講話してもらう形式に変更し、深く考えながら、具体的なイメージも持ちやすいように形式に改良を加えている。

③ 大阪大学教職実習演習受講生の受け入れ

平成 30 年度から、大阪大学の『教職実習演習*』を受講している学生を、8 月下旬から 12 月の間、『課題研究 I』の TA として受け入れるようになった。学生に対して、『課題研究 I』の授業中に、各班の研究に対して指導助言を行うこと、情報機器の操作についてアドバイスを行うことを求めた。平成 30 年度は 5 人、令和元年度は 6 人を受け入れた。令和元年度から SSH と共同でガイダンスを行い、TA として必要な視点や心構えに関する事前実習を行った。大学生および本校生徒の双方にとって、より充実したプログラムとなるように、少しずつ改善を加えている。

*大阪大学が教職課程で学ぶ学生を対象に、教育実習の事後学習として実施しているプログラム

④ 留学生交流会

毎年 1 月中旬、大阪大学国際教育交流センターと連携し、大阪大学の留学生を招聘し、第 1 学年 360 名が『課題研究基礎』の中で 1 年間取り組んできた研究をまとめ、英語でポスターを作り、留学生に対して発表したのち、留学生から出身国に関する発表を聞くなどの文化交流も行っている。来校した留学生は、平成 28 年は 42 人、平成 29 年は 44 人、平成 30 年は 50 名、令和元年には 51 名であった。『課題研究基礎』では、この留学生交流会で発表するということを 1 つの目標

として行っている。元々SSH事業として行われていたが、SGH指定に伴いSGH対象生徒に対しても行うようになるなど、どういう形態が最も教育的効果があるか検討を重ね、毎年プログラムの改善を行っている。

(3) 生徒の変化について

① グローバルマインドセットの変化

本校は平成27年のSGH指定当初より、「豊高型グローバルマインドセット評価のルーブリック」を設定し、その評価に努めてきたが、平成28年度からは生徒に対して「豊高型グローバルマインドセットに関するアンケート」を継続して行い、グローバルな視点や考え方、行動について調査をしてきた。ここでは、平成28年度から令和元年度までの4年間に、本校文理学科文科第2学年生徒（課題研究を受講中の生徒）を対象に10月・2月に行ったアンケート結果を分析し、生徒の変化を記述する。以下の【資料3】はアンケートの結果を1ポイントから5ポイントの5段階に換算し、平均値を取ったものである。

【資料3】グローバルマインドセットに関するアンケートの結果

		11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	平均
H28	10月	3.66	3.47	3.51	3.02	3.03	3.75	2.76	4.02	3.32	3.54	3.61	3.68	2.98	3.19	3.20	3.44	3.64	2.95	2.26	4.20	3.36
	2月	3.62	3.47	3.58	3.15	3.00	3.80	2.87	3.67	3.28	3.60	3.75	3.72	3.10	3.32	3.28	3.50	3.70	3.15	2.57	4.08	3.41
H29	10月	3.44	3.57	3.51	3.16	3.16	3.83	2.97	3.59	3.03	3.81	4.00	3.99	2.87	2.83	2.93	3.09	4.05	2.91	2.45	4.31	3.37
	2月	3.57	3.82	3.59	3.07	3.11	3.95	3.22	3.74	3.11	3.97	4.07	4.07	2.89	2.99	3.23	3.34	3.96	2.86	2.59	4.21	3.47
H30	10月	3.44	3.42	3.16	2.83	2.92	3.60	3.06	3.53	3.08	3.41	3.68	3.60	2.77	2.68	2.83	3.15	3.68	2.67	2.44	4.06	3.20
	2月	3.65	3.66	3.29	3.05	3.27	3.81	3.37	3.69	3.24	3.64	3.83	3.75	2.97	2.99	3.00	3.38	3.88	2.79	2.59	4.27	3.41
H31	10月	3.74	3.64	3.59	2.98	3.21	3.92	3.05	3.83	3.34	3.71	3.83	3.82	2.94	3.09	3.30	3.41	3.82	2.92	2.62	4.06	3.44
	2月	3.70	3.64	3.58	3.22	3.46	3.92	3.45	3.99	3.45	3.88	4.01	3.99	3.12	3.10	3.34	3.47	3.87	3.07	2.68	4.27	3.56

(注1) 1段目の番号はアンケートの設問項目を表す（添付資料1を参照）。

(注2) 令和元年度から本校では普通科が廃止され、文理学科のみとなったため、アンケートの母数は倍以上に増加している。

まず各年度の平均値について見てみると、どの年度も課題研究の中間発表直後である10月よりも研究発表直後の2月の方が数値が上昇している。また、2月の数値を比べてみると、平成28年度は3.41であったのに対し、令和元年度は3.56という結果となり、SGHの活動が深化するにつれ、生徒の自己評価も上昇していったと考えられる。

各項目について見ていくと、まず4年間を通じて30番「英語運用能力（4技能）を高めるために勉強したい」の数値が高く、本校生徒の英語学習への意欲が感じられる。一方で、29番「英語運用能力（4技能）に自信がある」の数値は平成28年度の2月に2.57という低いものであったが、令和元年度には2.68となり、この4年間で徐々に増加した。これはSGHの活動として留学生交流会や、豊高グローバルスタディーズの活動、即興型英語ディベートを用いたセミナー、海外研修、国内留学プログラムを計画し、生徒に英語を使わせる事業を増やしたことによって引き起こされたと見ることができる。しかし数値は2点台に留まり、「自信がある」に肯定的な評価をした生徒は令和元年度でも20%あまりであった。後述するように、生徒の英語能力自体はSGH指定期間中に大きく伸びているため、より生徒に対して自信を付けさせる取組みが必要である。

4年間を通じて数値が大きく上昇していったのは15番「粘り強く考え、他者へ提案できる」と17番「要点を捉え、他者へわかりやすく伝えられる」の2項目である。この項目は年々数値が上がり、平成28年度と令和元年度を比較するとそれぞれ0.46、0.58ポイントの上昇である。本校はSGH指定当初から目標の一つとして、発表の技能を身に付けることを念頭に置いており、課題研究では10月の中間発表会（口頭発表）と2月の課題研究発表会（口頭発表＋ポスター発表）ですべての班が発表することとしている。そのための準備にも多くの教員やTAが指導に入っている。その結果、生徒が自分の発表技術や伝えやすくする工夫に自信をつけたと考えられる。

一方で4年間を通じて伸びなかった、あるいは数値が下がった項目は24番「将来、外国で働くことも視野に入れて、職業を選択したい」、26番「自国と世界の発展に貢献したい」、28番「外国からの留学生に積極的に英語でプレゼンテーションやディスカッションをしたい」などである。共通しているのは「外国で活躍する」という視点であり、本校SGH事業の中でも重要な位置を占めていた項目であった。ただし、より詳細に見てみると、18番「さまざまな国の人びととの交流に興味がある」や20番「外国との文化の違いから困った出来事に直面したとき、相手が置かれた立場や気持ちを察する」は数値が高く、4年間の伸びも大きい。つまり外国の人と交流したり、関わったりしたいとは思っているが、仕事にしたいとは思わない、というのが豊中高校生の傾向であることがわかる。この傾向には2つの理由があると考えられる。1つはSGH事業全体の中で、

海外で働く（活躍する）人に会う機会が少なかったことである。例えば頻繁に海外へ研究や調査に行っている人にインタビューに行っていたが、その人が実際にどのような活動をしているのかに触れる機会は少なかった。今後は教員も働きかけることによって、海外で働くことの魅力を伝えていく必要がある。もう1つは生徒に興味関心はあるが、自信がないことである。実際に海外に出た生徒は全体から見ると少なく、校内での留学生交流会などでは達成感以上に英語で発表することの難しさを感じている生徒が多い。やはり1度の機会では反省点ばかり強調されてしまうため、今後も積極的に英語を使い、留学生と交流する機会を設けるべきであると考えます。

② 関西学院大学によるアンケート調査の活用

管理機関である大阪府教育委員会からアンケート調査の委託を受けた関西学院大学は、「高校生の国際関係についての考えや価値観などに関する調査」を大阪府内のSGH指定校に実施した。この調査では、記述式回答と選択式回答をもとに、SGHプログラム参加生徒の成長の検証およびグローバル人材としての資質の分析を行う。「入学直後である1年時の春」と「SGHプログラムがほぼ終了した時点である2年時の冬」の2時点間の差異が、SGHプログラムに参加した生徒と参加しなかった生徒の間で、どのように異なるかを比較した。また、府内の他の指定校と本校との差異についても、可能な設問に限り比較した。ただし、様々な教育活動が様々な場面で行われる高校において、これらの差異が必ずしもSGH事業によるものであると判断ができず、また調査数として不十分だという側面がある。また、今回の調査・分析対象は平成28年入学生401名の2年間であり、他学年との比較については今回割愛したうえで本校のSGHプログラムの効果を評価するものとしている。なお、SGHプログラム参加群（文理学科文科、入学生全体に占めるSGHプログラム参加群の割合は約20%）が79名、非参加群が80名（文理学科理科）と242名（普通科）の合計322名である。また、SGHプログラム参加群は文科で課題研究の受講者、SGS参加群はロジカルシンキング講座・即興型英語ディベート講座（通年実施）の受講者12名、海外参加群はマレーシアフィールドワークの参加者（1年時1月実施）7名を示している。非参加群のうち、理科の生徒はSSHプログラムを受講して課題研究も行っている。

（i）記述式の回答について

まず、調査のうち記述式の6つの質問のうち、有意な差異がみられた部分について記述する。ただし、記述式の回答については、関西学院大学の都合により回答の約半数を無作為に抽出して得点化がなされている。

（a）「グローバル化が人類に及ぼす影響について、どのように考えていますか。あなたが考えていることを述べてください。」という質問について

調査では10個の観点に基づいて評価が行われ、各観点においてそれぞれ0、1、2、の3段階で数値化がなされている。そのうち「何ないし誰への影響かに関する記述の全体的多様性」という観点において、次ページ【資料4】の結果が得られた。

この結果から、SGSや海外フィールドワークの参加群とSGHプログラム非参加群全体との間に差が認められ、参加群では多様性がやや高まっているといえる。関西学院大学からは、語学や思考力を養う講座に参加したグループの傾向に表れるだけでなく、他校と比べて論理性や根拠に基づいた主張を行う力が豊かであると感じられるとの所見をいただいた。

【資料4】質問(a)の回答結果

質問(a)	SGHプログラム参加群			非参加群	
	SGS	海外	全体	理科	全体
1年春	0.92	1.00	0.77	0.80	0.92
2年冬	1.42	1.29	0.90	0.75	0.84
変化	0.50	0.29	0.13	-0.06	-0.07

【資料5】質問(b)の回答結果

質問(b)	SGHプログラム参加群			非参加群	
	SGS	海外	全体	理科	全体
1年春	1.17	1.14	1.47	1.37	1.54
2年冬	1.67	2.00	1.53	1.41	1.53
変化	0.50	0.86	0.06	0.04	-0.01

（b）「あなたは日本は難民を受け入れるべきだと思いますか。受け入れるべき、受け入れるべきではない、どちらでもない、のうちあなたが考える「日本のとるべき政策」はどれですか。理由とともに述べてください。」という質問について

質問(a)と同様に、様々な観点のうち、「賛否の明確さ」という観点において【資料5】のような結果が得られた。この結果から、SGSや海外フィールドワークの参加群とSGHプログラム非参加群全体との間に差が認められ、全般的にほとんど変化が見られないのに対して、参加群では意見が明確だとされる方向に変化している。特にマレーシア海外フィールドワーク参加生徒はその傾向が顕著であり、事前学習と現地でのFWと学校交流、ホームビジット、大使館訪問を始めとす

る様々なプログラムを通して、自身の意見を明確に主張することができるようになったといえる。ただし、関西学院大学の所見には「府下の SGH 校に在る傾向として難民を受け入れた場合の国益に関するネガティブな影響に関するものばかりが多く記述されており、難民に紛れてテロリストが入ってくるという思い込みや難民と移民とを混同している回答が多くみられた」とあり、難民問題に関する知識不足と異質なものに対する偏った見方とが課題としてあげられた。

(ii) 選択式の回答について

次に、調査のうち「地球規模で社会に貢献する、または国際的な場で主導的な役割を担って活躍する」といったことに関わる事柄に関する意志ないし意欲や認識について、評定尺度法と呼ばれる方法で回答する選択式の 20 個の質問で見られた差異について記述する。20 個の質問はそれぞれ「ものすごく思う（6 点）」から「まったく思わない（1 点）」まで 6 点満点で数値化し、分析を行う。20 個の質問項目については添付資料 2 を参照のこと。

(c) 質問項目 6, 9, 10, 11, 12, 17 について

SGH プログラム参加群、非参加群ともにこれらの項目については低下傾向が顕著であった。関西学院大学の所見にもあるように、中高校生の時期に学業や部活動などで余裕がなくなり、グローバルな事柄に関する関心・意欲が維持できにくくなることや、様々な場面で困難な事象に遭遇することにより、大志を抱きにくくなるであろうことなどを考慮すると、一般的な高校生の傾向としてやむを得ない側面があるといえる。しかし SGH 担当者として、狭い世界に閉じこもるのではなく、常に興味・関心を地域や世界に向けてほしいという思いを持っていたため、この調査結果は非常に残念である。授業や講座のはじめには、事業のねらいや課題研究の必要性、世界の情勢等を説明して生徒の意欲を高めるようなオリエンテーションを行うが、回数を重ねるにつれて、直近のことにのめりこむあまり、生徒は広い視野を持てなくなってしまう。今後は、オリエンテーションで話したり体験させたりする内容を年度途中にも増やすことで、折に触れて生徒の視野を広げる工夫を行う。

【資料 6】項目 7, 12, 20 の回答結果

項目 (7)	SGH プログラム参加群			非参加群	
	SGS	海外	全体	理科	全体
1 年春	3.83	3.43	2.99	2.79	2.77
2 年冬	4.17	4.57	2.67	2.44	2.46
変化	0.33	1.14	-0.34	-0.35	-0.31

項目 (12)	SGH プログラム参加群			非参加群	
	SGS	海外	全体	理科	全体
1 年春	3.92	3.86	3.33	3.25	3.30
2 年冬	4.25	4.57	2.89	2.56	2.73
変化	0.33	0.71	-0.45	-0.69	-0.55

項目 (20)	SGH プログラム参加群			非参加群	
	SGS	海外	全体	理科	全体
1 年春	4.33	4.00	3.58	3.15	3.19
2 年冬	4.42	4.86	3.24	2.85	2.94
変化	0.08	0.86	-0.36	-0.30	-0.24

(d) 質問項目 7, 12, 20 について

前ページの【資料 6】のような結果が得られた。

SGH プログラム参加群、非参加群ともに時点間の変化に関して低下傾向がみられるのに対して、SGS や海外参加群においては増加傾向が見られた。SGS 講座ではディベートのテーマとして開発途上国の問題を取り上げたり、模擬国連のイベントに参加したりする機会があり、マレーシア海外フィールドワークでは研究交流をはじめ、発展を続けるクアラルンプールの街を歩いたり、パームやしの農園やマレー系の家庭を訪問したりして、日本以外の国々への興味・関心が高まったのだと考えられる。一方で、SGH のテーマに沿って課題研究を行ってきた SGH プログラム生が低下傾向にあることについては、前述の(c)と同様の状況であることが考えられる。

(iii) 関西学院大学によるアンケート調査を通して

参加した生徒数が少ないものの、SGS 講座とマレーシア海外フィールドワークを実施したことで、「地球規模で社会に貢献する、または国際的な場で主導的な役割を担って活躍する」といったことに関わる事柄について、望ましいと考えられる効果が得られたといえる。一方で関西学院大学の所見より、1 年時に課題研究基礎、2 年時に課題研究の授業を受講する SGH プログラム参

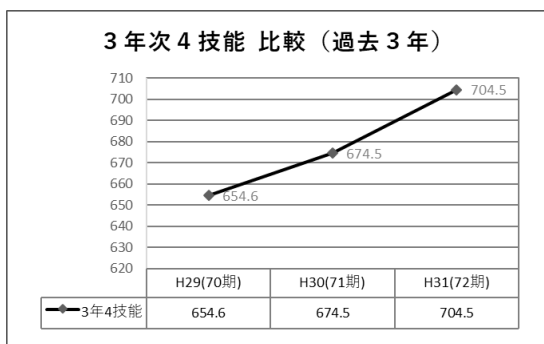
加群と非参加群とを比較した場合については、大阪府内の他校と比べて明確な差が認められないということも明らかになった。これは、「SGH プログラムを実施することを通して生徒たちにどのようなことを育もうとしたのか、またどのような場面で成長を促そうとしたのか」といったことを関西学院大学と本校 SGH 担当者との間で議論や共有が出来ていなかったことが要因の一つとしてあげられる。他にも、課題研究担当者間での目的の共有や生徒への声かけに温度差があったことも要因のひとつである。これは 2016～2017 年の調査であり、最終年度である今年度は課題研究担当者が意見や情報を交換する機会を当時よりは頻繁に持つようになっているため、今年度の調査結果が出た時にはまた異なった結果となっているはずである。しかし、プログラムの内容については基本的に前年度を踏襲し、改善を加えて 5 年めを迎えたため、次年度以降は前述の問題点を解決できるような改革を行っていく必要がある。いずれにしても、継続的な調査とその分析により生徒の実態に合わせた効果的な SGH プログラムを研究、模索していくことが重要であり、これらのプログラムを通して、生徒はもちろん担当教員の成長も期待される。

③ 英語力における変化

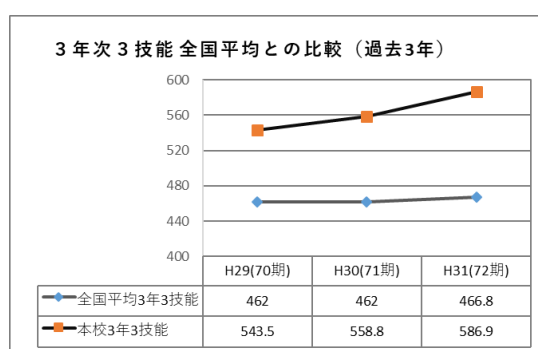
4 技能 (Reading, Listening, Writing, Speaking) を含む英語力を測るひとつの指標として、本校では GTEC for Students を平成 27 年度入学生 (本校 70 期生) から全員に実施している。3 年間の学習の成果が最も反映されていると考えられる 3 年次でのスコアを用い、本校 70 期生、71 期生、72 期生のスコアを比較検証した。

【資料 7】は、それぞれの学年の、3 年次における校内平均点を示している。3 年次での到達点大幅に伸びていることが読み取れ、4 技能を意識した授業等の取組みが過去 5 年間でより洗練されていった結果であると考えられる。

【資料 7】



【資料 8】

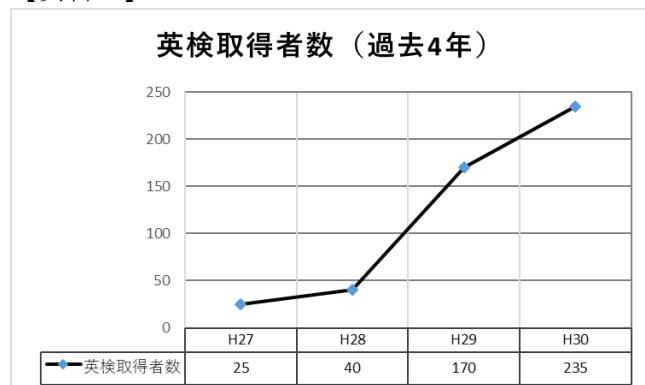


【資料 8】では全国平均点との比較を行っている。ただし、GTEC for Students を実施しているベネッセは、平成 30 年度まで 4 技能のうちの 1 つである Speaking の平均点を公表していなかったため、Speaking を除く 3 技能での比較を行った。3 技能での全国平均点は過去 3 年間はほぼ横ばいであるのに対し、本校では有意にスコアの伸びがみられる。これは、【資料 7】で示した本校生のスコアの伸びが、テストの易化等の理由によるものではないことを示唆している。

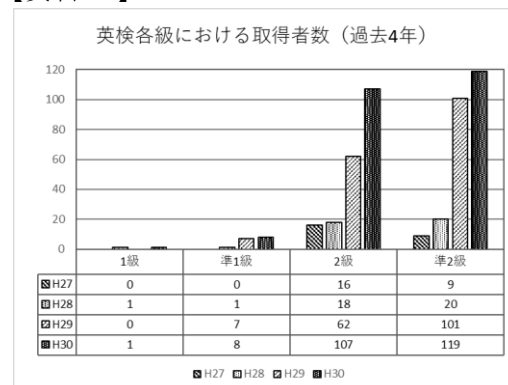
次に実用英語技能検定 (以下、英検) 取得者数という観点からも比較を行った。【資料 9】は平成 27 年度から平成 30 年度まで (※) の、英検準 2 級以上の取得者数の推移を示している。英検取得者数が大幅に増加していることが読み取れる。

※ 令和元年度については、まだ今年度中に 2 次試験を控えている生徒もあり、正確な数値が集計できていないため、ここでは示していない。

【資料 9】



【資料 10】



また、各級の内訳を【資料 10】に示した。特に、高校卒業レベルとされている英検 2 級取得者数の増加が著しい。

以上のデータより、本校生の 4 技能を含む英語力が過去数年間にわたり向上していることが読み取れ、また、その英語力の向上は本校での 4 技能を意識した授業等での取り組みの成果であると考えることができる。

(4) 教員の変化について

① 教員の指導力の向上・多様化

SGH 指定 5 年間を通じて、教員の教科指導にどのような変化があったかを考察するため、令和 2 年 2 月に本校教員を対象にアンケートを実施し、47 名から回答を得た。このアンケートは、一般的に課題研究で必要とされる方法論（グループセッションや調べ学習、プレゼンテーション）がどれだけ教科指導で取り入れられるようになったか、を問うもので、本校に 5 年以上勤務している教員は 5 年前と比較して、5 年未満の教員は着任当初と比較して回答したものである。

設問は問 1 から問 7 の 7 問で、それぞれに対し、①そう思う、②まあそう思う、③あまりそう思わない、④そう思わない、の 4 段階で回答する形式とした。以下の【資料 11】はその設問と、肯定的な回答（①及び②）をした教員の割合を示している。

【資料 11】SGH 教員アンケートの結果

問 1	「生徒が自分で調べる」活動を、授業で取り入れるようになった。	70.8%
問 2	「班(2人以上)で話し合う」活動を、授業で取り入れるようになった。	87.5%
問 3	「生徒が発表する」活動を、授業で取り入れるようになった。	81.3%
問 4	「生徒自ら問いを発見すること」を授業で重視するようになった。	64.6%
問 5	「教科の内容と現実社会との結びつき」を授業で重視するようになった。	60.4%
問 6	「批判的に物事を捉えること」を授業で重視するようになった。	54.2%
問 7	「論理的な物の考え方」を授業で重視するようになった。	72.9%

すべての項目で概ね肯定的な回答を得ており、SGH の指定以降、多くの教員が上記の活動等を意識して授業を行うようになったことがわかる。特に問 2 や問 3 の「班活動」や「生徒の発表」については 8 割以上の教員が取り入れるようになっており、生徒が主体的・対話的に活動するための工夫がなされている。一方で問 5 や問 6 の「現実社会との結びつき」や「批判的に捉えること」については未だ浸透しているとはいえず、どのような活動を授業に取り入れるべきか、学校全体で考える必要がある。だが、全体としては課題研究で必要とされる手法や技術の指導の多くが、課題研究の授業中だけでなく、教科指導にも組み込まれているといえる。ただし【資料 11】の教員アンケートの結果は、教員から見た授業の変化を捉えているため、深く分析をするためにはより多面的に評価するべきであり、注意する必要がある。

次ページの【資料 12】は課題研究に関して参画した外部人材の人数全体と、課題研究の手法（研究の方法）についての指導に携わった外部人材の人数を比較したものである。

【資料 12】外部人材が参画した延べ人数の経年比較

	H27	H28	H29	H30	H31
課題研究全般に関して外部人材が参画した延べ人数(全数)	180	212	254	299	289
課題研究の手法に関して外部人材が参画した延べ人数	10	3	2	2	2
TAなどが参画した延べ人数	113	99	91	139	143

外部人材が課題研究全般に参画した人数（全数）は、平成 27 年から徐々に増えているのに対し研究の方法について指導した外部人材の延べ人数は減少している。また、TA の数は増えており、簡単な指導等は教員が TA に指示することで生徒に伝えることが可能となっている。

この【資料 11】と【資料 12】から、以下のことがいえる。SGH 指定当初には、課題研究の方法論の指導は外部人材に頼っていたが、徐々に本校教員自身により指導することが可能になり、意識的に各教科指導で取り入れられるようになった。つまり、課題研究の方法論の指導が自走可能になったことができ、その結果、各教科の授業で主体的・対話的な活動が意識され、課題研究ではより専門的な探究に時間を割くことができるようになったのである。

SGH 中間評価では「教員相互の授業見学が実施され、課題研究の指導法は各教科・科目へアクティブ・ラーニングの取組みとして波及している点も高く評価できる。」との評価を得ていたが、今回の結果は評価された取組みをさらに発展させた結果と考えられる。

② 学校教育自己診断アンケート調査（教員）

本校は毎年、学校の教育活動が生徒の実態や保護者の学校教育に対するニーズ等に対応しているかどうかについて点検、改善するため、学校教育自己診断アンケートを生徒・保護者・教員に対して行っている。

次の【資料 13】は、学校教育自己診断アンケートのうち、教員を対象にしたものから「SGH 事業の展開は、生徒の意欲向上に寄与している」という項目を抜粋したものである。設問それぞれに対し、①そう思う、②まあ、そう思う、③あまり、そう思わない、④そう思わない、の4段階で回答する形式であり、以下では肯定的な回答（①及び②）をした教員の割合を示している。

【資料 13】 学校教育自己診断アンケート（教員）

	H27	H28	H29	H30	H31
SGH事業の展開は、生徒の意欲向上に寄与している。	76.3%	83.0%	80.8%	82.5%	88.9%

SGH 事業の生徒の意欲向上への寄与に対する肯定的回答の増加から、SGH 事業が教員間で広く認知され、受け入れられていることがわかる。これは、指定年度を経るにつれ課題研究などの指導に携わる教員の数が増え、また学校外へのフィールドワークに行く生徒の数も増えているため、生徒の積極的な活動に触れる教員が多くなったからだと考えられる。また、課題研究で学んだ内容を大学入試（推薦入試や A0 入試など）に活用する生徒も現れており、これらのことから「生徒の意欲向上」に結びつくと考え教員が増加したと見られる。

（5） 学校における他の要素の変化について

① 保護者の変化について

下の【資料 14】は本校が毎年実施している学校教育自己診断アンケートのうち、保護者を対象にしたものから「学校が SGH 事業に取り組んでいることを知っている」という項目について肯定的な回答をした割合を示している。

【資料 14】 学校教育自己診断アンケート（保護者）

	H27	H28	H29	H30	H31
学校がSGH事業に取り組んでいることを知っている。	87.5%	78.7%	75.7%	82.9%	90.0%

本校では中学生（及びその保護者）対象の学校説明会や、入学者説明会などで SGH 事業について説明や宣伝をしており、入学する前から SGH の取り組みについて知る機会を多く設けている。また、2月に行う課題研究発表会は保護者にも公開しており、生徒の発表を直に見ることができる。このような取り組みの中から SGH 事業についての保護者の認知度が徐々に上がっていったと考えられる。

② 進路実現の多様化

進路選択の際に、これまでは一般入試を利用する生徒が多くいたが、課題研究の成果などを活用した A0 や公募制入試を利用する生徒も増加している。次の【資料 15】では、本校の 2013（平成 25）年度からの A0・公募制入試の受験者数・合格者数を表している。

【資料 15】 指定前を含む過去 6 年間の A0・公募制入試の受験者数・合格者数

年度	2014（平成26）	2015（平成27）	2016（平成28）	2017（平成29）	2018（平成30）
受験者数	34	35	28	35	49
合格者数	19	17	20	20	19

受験者数・合格者数はほとんど変化していないが、平成 29 年度には受験者数が増加して 49 人の生徒が受験している。また、【資料 16】は、関西学院大学 SGH 対象公募推薦入学試験の平成 28 年度から令和元年度までの受験者数・合格者数の変動を表している。

受験者数・合格者数ともに大きな変動は見られないが、毎年 4～8 名の合格者が出ている。これらの結果から、一定数の生徒が、課題研究の成果を活用した入試制度を利用しており、進路選択の幅がこれまでとは広がってきていることが示唆される。

【資料 16】 関西学院大学 SGH 入試の受験者数・合格者数

年度	2016（平成28）	2017（平成29）	2018（平成30）	2019（平成31）
受験者数	8	12	4	5
合格者数	8	6	3	4

（６） 課題や問題点について

① 海外の生徒との共同研究ができなかった点について

本校が SGH に指定された際の構想調書には平成 29 年度には「海外の生徒との共同研究の推進」を計画していたが、実現することはできなかった。この点について 3 つの観点から記述する。

（i）海外フィールドワークの訪問先について

本校 SGH 事業の課題研究では 4 つのグループ（VISION）に分かれて研究を行っていたが、1 回の海外フィールドワークでそのすべての範囲を網羅することは難しく、また生徒に多くの地域を見てほしいという思いのもと、海外フィールドワークは隔年で地域を変えていた。指定 1、3、5 年次はインドネシア、指定 2、4 年次はマレーシアに設定し、第 1、2 学年を対象にすることで、希望する生徒は両方の国を訪問できるようにした（結果的に両方へ行った生徒はいなかった）。

しかしこの隔年方式にした結果、海外の高校や大学との連携が取りにくくなってしまった。毎年訪問すれば、双方の学校にとって恒例行事のような形式にすることもできたと考えられるが、隔年にしたことにより関係性が希薄になってしまった。

（ii）海外フィールドワークの時期について

さらにフィールドワークの時期的な問題もあった。本校は他の事業や行事との兼ね合いから、海外フィールドワークを年始に設定していたが、インドネシアとマレーシアの両国とも、年末や年始の時期に長期休暇を設けていることが多く、事前交流をしようとしてもそもそも時期が設定できないことが多くあった。指定 3 年次以降は、フィールドワークの時期を変更しようとしたが、最後まで変更することはできなかった。本校は夏季休業中に英語学研修を行っており、それとの兼ね合いが今後も求められる。

（iii）定期的な連絡体制の構築について

結果的に、連携校と定期的に連絡を取る体制が作れなかったことが大きな反省として残る。海外と連絡を取る場合には避けられない技術的な問題もいくつかあり、英語科以外では英語で迅速にメールを打てる教員が少ない、双方の体制が整っておらずメールの返信が遅い、などはその例である。その上、共同研究を持ちかけようとしても、相手校に「課題研究」のような授業が無い場合、十分な工夫をしなければ継続した研究や学習は困難である。

以上のことを踏まえると、継続的な連絡体制を整えるには、目的を共有した上で互いの学校の学習についてまで議論をし合えるようになる必要がある。この場合、教員の英語能力などの向上が求められるが、ある程度軌道に乗るまでは、橋渡し役として外部指導者等に積極的な関わりを求めるべきだとも考えられる。

② 論理的思考力を育成するプログラムが波及しなかった点について

SGH 指定時の構想調書の段階で「論理的に考える力」は大きな位置を占めており、特に課題研究の授業において論理的な思考の育成が目標となっていた。そのため、指定 2 年次の末に外部講師を招き、ロジカルシンキング講座を単発で開催した後、指定 3 年次には年間 10 回土曜日に開講されたスーパースターグローバルセミナー（SGS）に同様の講座を組み込むなど、毎年希望者に講座を開いている。参加者は年によって異なるが、指定 5 年次にも 37 人が集まり、アンケート結果も好評であった（詳細は研究開発実施報告書第 3 部を参照のこと）。

このように、希望者に対しては講座を毎年開催してきたが、この取組みを生徒全体に広げることができなかったことが反省点である。外部講師からは、講座で行っている論理的思考のプロセスは 1 度聞いただけでは習得できるものではなく、何度か練習を重ねて自分の思考に馴染ませる必要がある、という助言を得たが、課題研究の時間に研究をしながら年間 6～10 時間のトレーニングを導入するのは非常に困難であった。そのため、この講座の内容をそのまま全校的に広めることができなかった。

しかし、この講座の内容とは別に論理的思考力を育む取組みも始まっており、課題研究において、思考を可視化するような教材の開発が進められている。主張・根拠・論拠をそれぞれ記入することで、三角ロジックを形成するワークシートや、研究発表をする際に必要な情報を穴埋め形式で確認するワークシートなどを導入することにより、教員による講義に頼るのではなく、生徒自身が研究を進めながら論理的な思考を体感できるような教材開発をめざしている。この取り組みはこれからも継続して行っていく。

（７） 今後の持続可能性について

① 各取組みの継続

（i）海外フィールドワーク

これまでの5年間で紡いできた関係を継続していく方向性のもと、本校の課題研究テーマに即して、訪問する国・施設・学校、時期を選定する必要がある。また、大阪府教育委員会は令和元年度よりWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築事業の指定を受け、本校もその連携校としての指定を受けている。今後はWWL事業を活用しながら、SGH事業で築き上げてきた関係や作成してきたプログラムをかけあわせ、海外フィールドワークを継続させていく。

(ii) 課題研究Ⅰ（2年）

これまではVISION1～4と分かれていたが、来年度より「国際関係」「人間科学」「異文化理解」「地域創生」の4分野へと変わる。各VISIONで5年間培われてきた膨大な量の研究や文献、人脈を各分野で引き継ぎ、発展していく。

(iii) フィールドワーク、留学生交流会、SGS

本校の課題研究Ⅰでは、実際に専門家や企業を訪れて、話を聞き、それをヒントに課題解決の方法を探るフィールドワークを重視している。また、留学生交流会についても課題研究基礎の1つの目標となっており、重要な行事であると位置づけている。また、SGSについても、一般の教科では学べない内容を意欲の高い生徒に対して提供できるプログラムである。これらのプログラムについて、来年度以降も持続可能なものとするために、生徒負担となるが継続していく。

(iv) 管理機関の関わり方

今後も大阪府教育委員会からは、WWL事業などを通じ、課題研究活動を発展させていくために指導助言をいただく予定である。必要な予算措置を受けるなど、大阪府教育委員会と連携しながら、本校独自でも持続可能な取組みを継続・発展させ、本校の特徴を生かした新たな課題研究活動を作り上げていく。

【担当者】

担当課	教育振興室高等学校課	T E L	06-6944-7093
氏 名	福本 美紀	F A X	06-6944-6888
職 名	指導主事	e-mail	FukumotoM0704@mbbox.pref.osaka.lg.jp

【添付資料 1】 SGH グローバルマインドセットに関するアンケート

<<令和元年度 豊高型グローバルマインドセットに関するアンケート>>

※ 抜粋版

このアンケートはグローバルな視点や考え方、行動について質問するものです。

各質問に、正解や不正解はありません。あなたに最も適するものをマークしてください。

番号	質問項目
11	世界各地の異なる文化、歴史、地理、社会に強い関心を持っている。
12	世界に通用する高い教養を持ちたいと思い、その努力をしている。
13	外国人と交流する機会があれば、その国の文化について自分が知っている知識が正しいかどうか確かめてみたい。
14	世界の出来事がもたらす経済的・政治的・文化的・社会的影響について、他者とディスカッションしたい。
15	必要に応じて資料を調べたり、他者から聞き取りをしたりなどして、粘り強く考え、新たなアイデアを他者へ提案できる。
16	たとえ自分とは異なる考え方や価値観に出会ったとしても、偏見なく受け入れることができる。
17	説明が難しく複雑なテーマであっても、その要点を捉え、他者へわかりやすく伝えられる。
18	さまざまな国の人びととの交流に興味がある。
19	さまざまな国の人びとと親しくなれる自信がある。
20	外国との文化の違いから困った出来事に直面したとき、相手が置かれた立場や気持ちを察する。
21	外国との文化の違いから困った出来事に直面したとき、自分と異なる立場の人の価値観を尊重する。
22	外国との文化の違いから困った出来事に直面したとき、相手との協力関係を構築しようとする。
23	将来、外国の大学や大学院への留学も視野に入れて、勉強したい。
24	将来、外国で働くことも視野に入れて、職業を選択したい。
25	海外ボランティアなどの国際的な活動に積極的に参加したい。
26	将来は世界のさまざまな問題の解決に役立つ人材になり、自国と世界の発展に貢献したい。
27	日本の歴史・文化・社会への深い教養を持ちたい。
28	外国からの留学生に積極的に英語でプレゼンテーションやディスカッションをしたい。
29	英語運用能力（4技能）に自信がある。
30	英語運用能力（4技能）をさらに高めるために勉強したい。

筑波大学SGH調査班「次世代を担う高校生のグローバル意識と行動に関するアンケート調査」（2015）を参照した。

【添付資料 2】 関西学院大学アンケート 選択式設問

以下の文章の内容について、あなたは、どのように考えていますか。あなたの考えにもっとも当てはまる
ところの数字に1つずつ○を付けてください。

*どの項目にも答えてください。

	も の す 思 う	か な り 思 う	わ り と 思 う	す こ し 思 う	ほ 思 と わ ん な ど い	ま 思 っ た わ た な く い
1. 地球規模で社会に貢献したい。	1	2	3	4	5	6
2. 英語によるコミュニケーション能力を高めたい。	1	2	3	4	5	6
3. 開発途上国の大学に入学したい。	1	2	3	4	5	6
4. 国際的な展開をしている企業で働きたい。	1	2	3	4	5	6
5. (日本以外の) 先進国の文化や風土や政治経済の現状 などについて知りたい。	1	2	3	4	5	6
6. 日本のことを他国の人もっと知ってほしい。	1	2	3	4	5	6
7. 開発途上国の人たちと個人的に交流したい。	1	2	3	4	5	6
8. 国連や国際 NGO などの国際的な機関で働きたい。	1	2	3	4	5	6
9. 海外で、いろいろなことにチャレンジしたい。	1	2	3	4	5	6
10. 海外支援活動に参加したい。	1	2	3	4	5	6
11. (日本以外の) 先進国の人たちと個人的に交流したい。	1	2	3	4	5	6
12. 開発途上国の経済発展に貢献したい。	1	2	3	4	5	6
13. 日本のことをもっと知る必要があると思う。	1	2	3	4	5	6
14. (日本以外の) 先進国の大学に留学したい。	1	2	3	4	5	6
15. 現在起こっている世界の出来事の背景や歴史について 学ぼうと思う。	1	2	3	4	5	6
16. 開発途上国の大学に留学したい。	1	2	3	4	5	6
17. 日本がより望ましい国になることに貢献したい。	1	2	3	4	5	6
18. 環境問題の解決に貢献したい。	1	2	3	4	5	6
19. (日本以外の) 先進国の大学に入学したい。	1	2	3	4	5	6
20. 開発途上国の文化や風土や政治経済の現状などについて 知りたい。	1	2	3	4	5	6

第2部 SGH 研究開発の成果と課題

第1章 令和元(2019)年度 SGH 事業の成果

第1節 SGH 校としての指定を受けるまで

本校は、平成 23 年度に大阪府教育委員会より大阪府立高校の中でも進学指導特色校（グローバルリーダーズハイスクール（GLHS））10 校のうちの1校として指定を受けた。1 学年 9 クラスのうち、文理学科 4 クラスの設置（残る 5 クラスは普通科）をはじめとする様々な改革や新たなチャレンジが行われるようになった。平成 30 年度入学生からすべてを文理学科として募集した。その中で、これまでの研究開発をもとにして、「『多様性』と『文化』を掛け橋にして世界を牽引する人材を育成する」という課題を設定し、欧米中心のグローバルスタンダードを超えた新たなパラダイムを構築しうる人材の育成プログラムの開発を進めることとなった。平成 26 年度にはスーパーグローバルハイスクール（SGH）アソシエイト校の、翌平成 27 年度には SGH 校の指定を受けるに至る。同年、スーパーサイエンスハイスクール（SSH）第 2 期めの継続が決定し、さらにスーパーイングリッシュティーチャー（SET）による TOEFL 仕様の授業を文理学科第 1 学年 80 名対象に開始した。本校生徒の 8 割以上がセンター試験を受験する学校であることから、受験との関連性が少ない学習に対する意欲が低くなる生徒も見受けられる。そのような生徒に対しても、課題研究に対するモチベーションを持たせることが、当初の大きな課題であった。

第2節 SGH 研究開発の概要

本校の SGH 事業を整理すると、文理学科 1 年次「課題研究基礎」（通年 1 単位）、文理学科文科 2 年次「SG 課題研究Ⅰ」（通年 2 単位）、文理学科文科 3 年次「SG 課題研究Ⅱ」（通年 1 単位）、第 1・第 2 学年の希望者を集めての「スーパーグローバルセミナー（SGS）」（土曜午前に不定期開催）、SGS のコアメンバーである「豊高グローバルスタディーズ」（毎週火曜・木曜放課後実施）、課題研究の延長線上にあり自由に参加できる「SGH 講座・SGH 講演会」という大きく 5 つの取組みに分類することができる。このうち SGH 事業の根幹をなす取組みが「課題研究」であり、これを直接的あるいは間接的に補強するものがその他の取組みとなっている。各取組の詳細については、本書の第 3 部 SGH 各活動実施報告をご覧いただきたい。当初の構想段階での SGH 研究開発の計画概要は以下の通りである。

《以下、「構想調書別紙様式 6」より抜粋》

今回の SGH プログラム研究開発は、文理学科の生徒を対象とした「スーパーグローバルプログラム（SGP）」で、1 年次には「課題研究基礎」におけるグローバルシチズンリテラシー講座や大阪大学留学生に対して研究発表プレゼンテーションを行うグローバルワークショッププログラムで、ロジカル・シンキングの手法やコミュニケーション力およびディスカッション力を育む。それらをもとに、2・3 年次には、「課題研究Ⅰ」「課題研究Ⅱ」において「日本とイスラームから新たなスタンダードを創造する－GLOBAL VISION 目的 1～4－」の観点で、欧米文化とともに世界の大きな潮流であるイスラーム文化の理解の深化を通じたビジネスプランを世界に向かって発信・提案できる人材育成プログラムを開発する。

さらに、普通科の生徒も含めた全生徒から参加者を募る「スーパーグローバルセミナー（SGS）」、また全生徒を対象とする「TOYONAKA グローバルプログラム（TGP）」を実施し、グローバルシチズンシップの育成を目標に、①「教科連携プログラム」で、全生徒を対象に各教科の中でグローバルな視点に立った教材を開発し、②「ワークショッププログラム」で、留学生との交流・ワークショップを実施し、③「外部連携プログラム」で、大学・企業・JICA・NPO 法人等より講師を招き、講演及び実習等を行う。

第3節 SGH 研究開発の仮説

これらの SGH プログラム研究開発をふまえて設定した仮説は以下の通りである。

《以下、「構想調書別紙様式 6」より抜粋》

ア 企業・大学・JICA・NPO法人や研究機関等と連携して、①グローバルな問題解決能力を育成するための教養及びクリティカル・シンキングの手法による分析力を身に付け、日本とイスラーム諸国の歴史的・文化的・社会的関係を学ぶことで、相互に共通する人間観・社会関係観・ビジネススタイル等を見出し、そこから欧米中心の「グローバルスタンダード」にとらわれない、日本とイスラームのビジネス・スタンダード・モデルを構築できる。さらに、日本・イスラームの新たなスタンダードによる起業・クラウドファンディング等々を考案・提案することで、イスラーム世界におけるビジネスリーダーとしての素養を育成できる。②これらの学びと実践を通し、生徒たちに、自分にとって未知の分野やコミュニティに果敢に飛び込んでいく積極性や冒険心を育むことができる。

イ 企業・大学や研究機関等と連携した TGP 及び SGP の「課題研究基礎」「課題研究Ⅰ・Ⅱ」で、グローバルに物事を考えなければならない事例をクリティカル・シンキングやディベート、ケースメソッド等のアクティブラーニング型の学習法のプログラムを学習することで、学際的で超越的な幅広い知識・教養を身に付け、物事を幅広く深く考えたり、論理的に考えたりすることができるようになり、生徒の自己表現力を含めたプレゼンテーション能力やディスカッション能力を育成できる。

ウ 英語力として、TOEFL65点以上、GTEC650点以上を取得することができれば、大学院留学生、交換留学生、交流学生等とできる限り多くディスカッションを行うことができる。

エ 海外でのフィールドワーク、学校訪問、インターネットなどを活用して海外の生徒との交流や共同研究ができれば、よりグローバルな視点に立った課題を設定することができる。

第4節 SGH 研究開発の仮説と検証

第1項 昨年度の課題をふまえた今年度の方針

3年めに実施されたSGH中間評価において、本校は「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される」という、上から2番めの高評価をいただいた。同時に「「グローバルな社会問題を発見・解決できるコンピテンシーの習得」が目標となっているため、今後はその目標にどのくらい近づいているのかを示す分析が求められる」との講評をいただいた。そこで、生徒の資質向上の経年変化を把握することと、海外との交流を深化させることを、残る指定期間の本校SGHの課題として据えることとなった。

また、昨年度浮き彫りになった課題のうち、特に改善すべき重点課題として考えられることは次の3点である。①VISIONごとの達成目標の明確化と共有したうえで、各VISIONを横断的に結びつけ、一つのチームとして捉えること、②生徒に身に付けさせる資質・能力の数値化による目標設定と達成へ取り組むこと、③効果的・効率的な課題研究の指導モデルを提供することである。

以上の課題をふまえ、今年度の各取組みについての方針を決定した。まず、①について、これまでの4年間の先行事例を再度見直し、各VISIONで取り上げるべき目標を確認する。その上で、本校の目標である「欧米中心の「グローバルスタンダード」にとらわれない、日本とイスラームから新たなビジネススタンダードモデルを構築し、企業への提案や起業を行い、イスラーム世界のビジネスリーダー」を育成するために、VISION1～4で統一したプロジェクトを実施することにより、全VISIONが一体となり、より効果的な教育プログラムを開発することを目標とする。具体的には、これまでは各VISIONの裁量が大きかった年間プログラムについて、SGH研究開発委員会が主導し、年間プログラムを決定し、全VISIONに対して同時期に同じテーマに即した内容のプログラムを行う（例えば、年度当初の早い時期に「ビジネスプラン」についての講義を全VISIONに取り入れるなど）。そのために、これまでは主担当者のみが集まり、会議を毎週行っていたが、課題研究担当者全員が参加する会議へと変更し、目標の確認、授業の進捗状況や生徒情報の共有、課題研究・各種フィールドワークに関する議論を積極的に実施する環境をつくることにした。②については、特に2年生について、マインドセットの各項目内容を再検討しなおし、各目標に対するモデルとしての項目設定を再度行う。その上で、課題研究授業を受ける前の調査結果の得点

を基準として、授業後の各項目の調査結果の得点の向上をめざす。③については、今年度から「課題研究」授業の履修者が倍増することにより、指導の質的維持を図りながら効率性を担保する必要がある。具体的には、ワークシートによる教材化を進め、教員の個別的で多様な指導は最小限に抑え、共通の教材を通じて生徒の能力を育成する指導方法の有益性についての検証を行う。教材の開発については、本校の SSH 研究開発委員会と共同で進める。文系・理系ともに統一した教材を使用することにより、“豊中高校の課題研究”として共通の目標に向かい、本校の教員であれば、教科を問わず、誰でも課題研究を担当することができるような環境作りをめざす。そして、このような課題研究の指導モデルを SGH 関連校のみならず、広く大阪府内の高校などに人材育成プログラムの先進的事例としての提供と発信を行う。

第2項 今年度の取組 ～研究開発の仮説と検証「ア」～

上記の仮説「ア」の下線部①「グローバルな問題解決能力を育成するための教養」を身に付ける、及び下線部②「自分にとって未知の分野やコミュニティに果敢に飛び込んでいく積極性や冒険心を育む」とする目標について、検証を行う。本項では、(1) 独自に実施している「豊高型グローバルマインドセット評価のルーブリック」のアンケート《第5部関係資料3ルーブリック・アンケートを参照》の結果に加えて、(2) 発表会後の授業で行う、振り返りグループワークの際に使用したワークシートのアンケートの結果を用いて検証を行う。なお、分析に際して、昨年度から生徒の資質向上の経年変化を把握するために、生徒の自由記述欄を「テキストマイニング」(使用ソフト KH Coder Ver. 3. alpha. 14b) の手法を用いて分析しており、本年度も引き続いて用いることとする。(3) 仮説「ア」に関連すると考えられる今年度の実績について記載し、検証を行う。

(1) 「豊高型グローバルマインドセット評価のルーブリック」のアンケートを用いた検証

以下の【資料1】は、第1年生の生徒360名及び第2学年文理学科の文科の生徒150名を対象に、1年生は入学当初(5月)と2月、2年生は前年度2月と今年度2月に実施したアンケートの結果を1ポイントから5ポイントの5段階に換算し、平均値を取ったものである。このアンケートは「豊高型グローバルマインドセット評価のルーブリック」をもとに、生徒に対してグローバルな視点や考え方、行動について質問をしたものである。なお、表中の「①」は課題研究Ⅰをはじめめる前の生徒に対して平成31年2月に実施した結果を、「②」は同じ対象の生徒に対し令和2年2月に実施した結果を表している。【資料1】では仮説「ア」の内容と関連すると考えられる設問(11～14、23～27)の平均値および差分を記載した。また、1年生の5月と2月および2年生の①と②の時期の各項目について、有意な差がみられるかどうかt検定を行い、分析した。

【資料1】「豊高型グローバルマインドセット評価のルーブリック」設問(11～14、23～27)

番号	設問概要	R1年1年			R1年2年			H30年1年		H30年2年	
		5月	2月	差分	①	②	差分	10	文②	文①	文②
11	世界の文化等への関心	3.67	3.69	0.02	3.63	3.7	0.07	3.89	4.02	3.44	3.65
12	世界に通用する教養	3.8	3.67	-0.13	3.58	3.64	0.06	3.61	3.74	3.42	3.66
13	外国についての知識の活用	3.77	3.64	-0.13	3.54	3.58	0.04	3.57	3.70	3.16	3.29
14	世界の事象についての論議	3.4	3.19	-0.21**	3.14	3.22	0.08	3.01	3.23	2.83	3.05
23	大学・大学院の留学	3.12	2.97	-0.15*	3.02	3.12	0.10	3.17	3.34	2.77	2.97
24	海外での職業選択	3.24	3.14	-0.1	3.05	3.1	0.05	3.25	3.38	2.68	2.99
25	国際的活動への参加	3.3	3.2	-0.1	3.26	3.34	0.08	3.28	3.52	2.83	3.00
26	自国と世界の発展への貢献	3.66	3.54	-0.12	3.42	3.47	0.05	3.43	3.61	3.15	3.38
27	日本の文化等の教養	3.81	3.85	0.04	3.79	3.87	0.08	4.03	4.08	3.68	3.88
平均		3.6	3.5		3.4	3.6		3.5	3.6	3.1	3.3

*p<.05、**p<.01

【資料1】から、令和元年度の1年生については、番号11「世界の文化などへの関心」や番号27「日本の文化等の教養」の項目で数値が上昇している。一方、特に番号14「世界の事象についての論議」で有意な差がみられた ($t(681)=-2.81, p<.01$) ほか、ほとんどの項目についても数値が下がっている結果がみられた。今年度から「課題研究基礎」の授業は、1学期から「SDGsにかかわる提案および家庭でできる自由研究」についての問いを立て、その問いに対して答えていくという方法をとっている。《詳細は第3部第1章を参照》下線部①について、自らが調べれば調べるほど、自分の身のまわりのことについて実は何も知らなかったということや、わからないことが出てくるなど、自分自身の教養のなさを感じることから、このような結果になっていると考えられる。また、下線部②についても、課題研究基礎の授業では、パソコンの基本的なスキルの習得という観点から、主にインターネットを通じて情報を得ている生徒が多い。実際に体験したことではない知識に基づくため、自分の身近な問題として捉えることができていることが影響していると考えられる。一方、第2学年について検討してみると、前年2月から今年度2月にかけて、有意な差はないが(例えば、 $23;t(485)=0.82, n.s.$)、どの項目も数値が上昇しており、教養や積極性、冒険心を育むことができている可能性が高いと考えられる。特に、第2学年生徒が最も伸びたと回答した項目は番号23「将来、外国の大学や大学院への留学も視野に入れて、勉強したい」であった。自分の進路について考える機会が増え、また課題研究のフィールドワークで様々な企業や団体と交流する中で、外国で学習することへの抵抗感が下がったと考えられる。

(2) 発表会後のアンケートを用いた検証

このアンケートは第2学年文理学科の文科の生徒を対象に、毎年、中間発表会後(9月下旬)と、課題研究発表会後(2月初旬)に実施しているもので、選択式の項目【資料2】と、各発表会終了後に個人の反省をもとに班での振り返りをおこなうための記述式の項目からなるワークシートを用いた。【資料3】、【資料4】は、選択式の項目について、令和元年度と30年度の10月と2月の数値を比較したものである。また、記述式アンケートのうち、仮説「**A**」に関連すると考えられる「自分たちの発表で改善した方がいいと思うところ」という項目について、中間発表会後と課題研究発表会後の結果について検証を行った。その結果が【資料5】、【資料6】、【資料7】である。

【資料2】発表会後のアンケート 選択式項目

(すべて5点満点、5…とてもそう思う 4…そう思う 3…どちらでもない 2…そう思わない 1…全く思わない)

(1)半年間の課題研究での研究活動は面白かったですか？
(2)半年間の研究活動は自分なりに満足いくものでしたか？
(3)半年間の研究活動を通して、さらに自分で研究や学習を進めたいと思うようになりましたか？
(4)研究活動を通して、世界の諸問題やイスラームに対する興味・関心が高まりましたか？
(5)研究活動をする上で、班のメンバーと協同して取り組むことができましたか？
(6)研究活動や発表の準備を通して、わかりやすく人に伝えるための工夫ができましたか？
(7)当日の発表を通して、自分の考えをわかりやすく表現する力が高まったと思いますか？
(8)将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えるようになりましたか？
(9)SGHでの課題研究が、大学の専攻分野の選択に影響を与えましたか？

【資料3】令和元年度 文科第2学年 150名 発表会後のアンケート 選択式項目

問い	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	平均
10月	3.8	3.6	3.8	4.1	4.4	4.0	3.8	3.5	2.5	3.7
2月	3.9	3.9	3.7	4.1	4.4	4.2	4.1	3.7	2.6	3.9
差	0.1	0.3	-0.1	0	0	0.2	0.3	0.2	0.1	0.2

【資料4】平成30年度文科第2学年 82名 発表会後のアンケート 選択式項目

問い	(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	平均
10月	3.8	3.6	3.8	4.1	4.5	4.0	3.7	3.2	2.4	3.7
2月	3.6	3.5	3.2	3.7	4.3	4.1	3.8	3.0	2.5	3.5
差	-0.2	-0.1	-0.6	-0.4	-0.2	0.1	0.1	-0.2	0.1	-0.2

【資料3】、【資料4】を比較すると、令和元年度は10月と2月のデータの差の値が、平成30年度よりも数値が高くなっている項目が多かった。特に「(2) 半年間の研究活動は自分なりに満足のいくものでしたか」という項目に対して、平成30年度と比べて10月時点では同じ数値だったが、2月では令和元年度の方が高い数値となっている。中間発表の結果を受けて、生徒自らが個人または班の問題点を考え直して、後半の課題研究に取り組んだ結果であると考えられる。また、「満足度」はその他の項目の土台となるべきもので、プラスの影響を及ぼしていることが推測される。また、「(8) 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考えるようになりましたか」という項目について、今年度は平成30年度に比べて高い数値となった。課題研究を通して、海外へと飛び出していくことに興味・関心が高まっていることを表していると考えられる。

次に、記述式アンケート部分のうち項目(2)「自分たちの発表で改善した方がいいと思うところ」の自由記述データについて、テキストマイニングの手法を用いて分析を行った。【資料5】は10月中間発表会後のアンケート、【資料6】は2月課題研究発表会後のアンケートに関する抽出語の上位30語とその出現頻度について記載した。【資料7】は2月課題研究発表会後のアンケートに関して、出現パターンの似通った語を線で結んだネットワークを描いた。なお分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を3に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を30に設定した。【資料7】に示した語の共起関係をもとに、分析者が特徴的な記述のまとまりと判断したものを項目として立て、生徒の記述を“ ”内に記載する。

【資料5】 令和元年度文科第2学年 150名 10月中間発表会後のアンケート 記述式項目
「自分たちの発表で改善した方がいいと思うところ」についての抽出語上位30語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	原稿	60	11	噛む	9	21	時間	6
2	見る	53	12	自分	9	22	声	6
3	話す	29	13	言葉	8	23	操作	6
4	発表	18	14	読む	8	24	速い	6
5	調整	15	15	スムーズ	7	25	伝える	6
6	パワー	14	16	覚える	7	26	スライド	5
7	ポイント	14	17	進行	7	27	周囲	5
8	向く	13	18	速度	7	28	少ない	5
9	前	13	19	顔	6	29	早口	5
10	内容	10	20	詰まる	6	30	必要	5

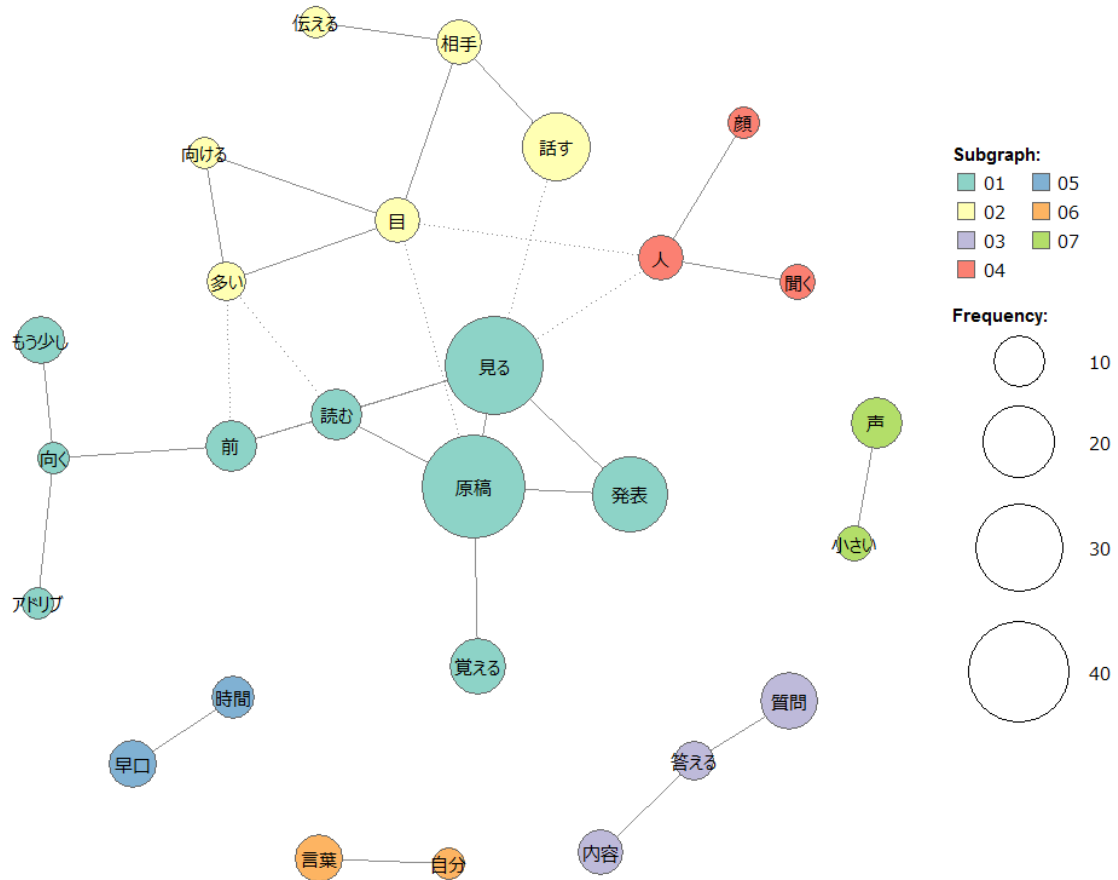
Waad 法、距離 Jaccard で分類。

【資料6】 令和元年度文科第2学年 150名 2月課題研究発表会後のアンケート 記述式項目
「自分たちの発表で改善した方がいいと思うところ」についての抽出語上位30語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	原稿	42	11	読む	10	21	噛む	6
2	見る	38	12	もう少し	9	22	説明	6
3	発表	22	13	言葉	9	23	多い	6
4	話す	18	14	早口	9	24	答える	6
5	少し	17	15	人	8	25	小さい	5
6	質問	13	16	相手	8	26	聞く	5
7	覚える	12	17	内容	8	27	アドリブ	4
8	ポスター	11	18	目	8	28	顔	4
9	声	10	19	時間	7	29	緊張	4
10	前	10	20	話せる	7	30	向く	4

Waad 法、距離 Jaccard で分類

【資料 7】令和元年度文科第 2 学年 150 名 2 月課題研究発表会後のアンケート 記述式項目
「自分たちの発表で改善した方がいいと思うところ」共起ネットワークの結果



【資料 5】、【資料 6】ともに、今回の生徒の回答数が 150 であったことや、設問の抽象度が高かったことから、全体像を分析した結果としては十分とは言えない側面があるが、どちらに共通しているのは「原稿」「発表」「見る」「話す」などの語が出現している。【資料 7】の中央部からも、「原稿」などの語のまとまりが見て取れる。具体的には、「原稿」という語は“原稿ばかり見て、聞いている人を見て話せなかった”などの文脈で使われている。このことから、多くの生徒たちは『発表の仕方』について特に改善をした方がよいと考えていることがわかる。また、【資料 7】上側には、「相手」「話す」「伝える」などの語のかたまりが見て取れる。具体的には“相手に伝えるように話す”などの文脈で使われており、『意思疎通を伴った発表』についても改善する必要があると考えている。一方で、「原稿」という語は 10 月の時点では 60 回出現しているが、2 月時点で 42 回に減少している。このことは中間発表で出た反省を活かし、課題研究発表に臨んでいた様子がうかがえる。このように課題研究の授業を通して、自分自身を見つめ、自分に足りない力は何かということについての自省を行う中で、仮設「ア」のグローバルな問題解決能力を育成するための教養を身に付けていっていると考えられる。

(3) 今年度の実績を用いた検証

- [3 年] ・ [VISION 1] JICA 関西において、国際協力イベント「モノを通して見る、よりよい世界」にフェアトレードの普及・実践団体パネリストとして参加
- [2 年] ・ [VISION 1] ロハスフェスタ万博に出展し、販売・普及実践
 - ・ [VISION 1] 豊中高校近辺の洋菓子店「54CLOSET」を訪問し、フェアトレード商品販売をプロデュース
 - ・ [VISION 3] 第 7 回高校生ビジネスプラングランプリにおいて、文科 2 年生がベスト 20 (セミファイナリスト) 及びベスト 100 に選出

＊クラウドファンディングの実施には至らなかったが、4年めまでの生徒たちの研究を積み重ねて、実際に店舗と連携して、フェアトレード商品を仕入れ、販売するなどフェアトレードの普及を図るビジネスモデルを実践したり、イスラームに関するビジネスモデルを構築したりするなど一定の到達点に達した。

第3項 今年度の取組み ～研究開発の仮説と検証「イ」～

次に仮説「イ」の下線部「学際的で超越的な幅広い知識・教養を身に付け、物事を幅広く深く考えたり、論理的に考えたりすることができるようになり、生徒の自己表現力を含めたプレゼンテーション能力やディスカッション能力を育成できる。」とする目標について検証を行う。本項でも今年度の方針「生徒の資質向上の経年変化の把握」をふまえて、（１）先述の「豊高型グローバルマインドセット評価のループリック」のアンケート（第5部関係資料3を参照）の結果に加えて、（２）発表会後の授業で行う振り返りグループワークの際に使用したワークシートのアンケートの結果を用いて検証を行う。また、（３）「アクティブラーニング型の学習法」を課題研究の授業のみならず、教科の授業にも取り入れた実践について詳述する。

（１）「豊高型グローバルマインドセット評価のループリック」のアンケートを用いた検証

【資料8】では仮説「イ」の内容と関連すると考えられる設問（15～22、28～30）の平均値および差分を記載した。また、1年生の5月と2月および2年生の①と②の時期の各項目について、有意な差がみられるかどうかt検定を行い、分析した。

【資料8】「豊高型グローバルマインドセット評価のループリック」設問（15～22、28～30）

番号	設問概要	R1 年 1 年			R1 年 2 年			H30 年 1 年		H30 年 2 年	
		5 月	2 月	差分	①	②	差分	10 月	②	①	②
15	アイデアの提案	3.15	3.21	0.06	3.30	3.46	0.16	3.10	3.40	2.92	3.27
16	他の価値観への偏見の無さ	3.94	3.88	-0.06	3.80	3.92	0.12	3.86	4.05	3.60	3.81
17	複雑な内容の伝達	3.00	3.03	0.03	3.19	3.45	0.26**	3.14	3.42	3.06	3.37
18	異文化交流への興味	3.96	3.87	-0.09	3.78	3.99	0.21*	3.94	4.08	3.53	3.69
19	異文化と親しむ自信	3.41	3.25	-0.16*	3.30	3.45	0.15	3.34	3.59	3.08	3.24
20	異文化への理解	3.85	3.79	-0.06	3.63	3.88	0.25**	3.79	3.86	3.41	3.64
21	異文化の尊重	4.00	3.92	-0.08	3.79	4.01	0.22*	3.90	3.97	3.68	3.83
22	異文化との協力	3.99	3.96	-0.03	3.81	3.99	0.18*	3.88	4.01	3.60	3.75
28	留学生との英語での交流	3.26	3.11	-0.15	3.03	3.07	0.04	3.06	3.28	2.67	2.79
29	英語運用能力への自信	2.59	2.4	-0.19*	2.29	2.68	0.39***	2.51	2.59	2.44	2.59
30	英語運用能力の向上心	4.18	4.27	0.09	4.15	4.27	0.12	4.16	4.35	4.06	4.27
平均		3.6	3.5		3.5	3.7		3.3	3.7	3.3	3.5

*p<.05、**p<.01 ***p<.001

第1学年については、番号15「アイデアの提案」と番号30「英語運用能力の向上心」が入学当初と比べて高い数値だった。特に番号30については、1月に留学生を招いての発表会を行ったこともあり、英語の力を伸ばしたいと実感した生徒が多かったと考えられる。また、番号29「英語運用能力への自信」では有意な差がみられた（ $t(673)=-2.36$, $p<.05$ ）ほか、ほとんどの項目において、2月の結果の数値が下がっていた。これは仮説「ア」で述べた理由と同様のことが考えられる。第2学年においては、全ての項目で①に比べて②の時期のほうが高い数値であった。特に、番号17「説明が難しく複雑なテーマであっても、その要点を捉え、他者へわかりやすく伝えられる」や番号20「外国との文化の違いから困ったできごとに直面したとき、相手が置かれた立場や気持ちを察する」や番号29「英語運用能力（4技能）に自信がある」については、統計的に有意な差がみられた（17； $t(484)=3.16$, $p<.01$ 、20； $t(486)=3.30$, $p<.01$ 、29； $t(486)=4.08$, $p<.001$ ）。番号17については、中間発表で「発表すること」に対する難しさを感じ（前項資料7参照）、課

題研究発表会に向けて準備をする中で、その問題点を改善しようと試みたことが影響していると考えられる。また、番号 20、29 については、課題研究Ⅰで行ったフィールドワークで様々な専門家および在日外国人の方々からお話をうかがう機会があり、実際に異文化と接することができ、文化の違いがあっても相手の気持ちを考えることができるようになっていいると考えられる。また、時には英語でコミュニケーションを取る必要があり、その経験がこの結果につながっている。1 年生の結果と比較しても、2 学年の方が高い数値となっていることから、課題研究Ⅰで行っているフィールドワークを通じて実際に体験する学習は、異文化を理解するうえで有効である可能性が高いことが示された。

（２）発表会後のアンケートを用いた検証

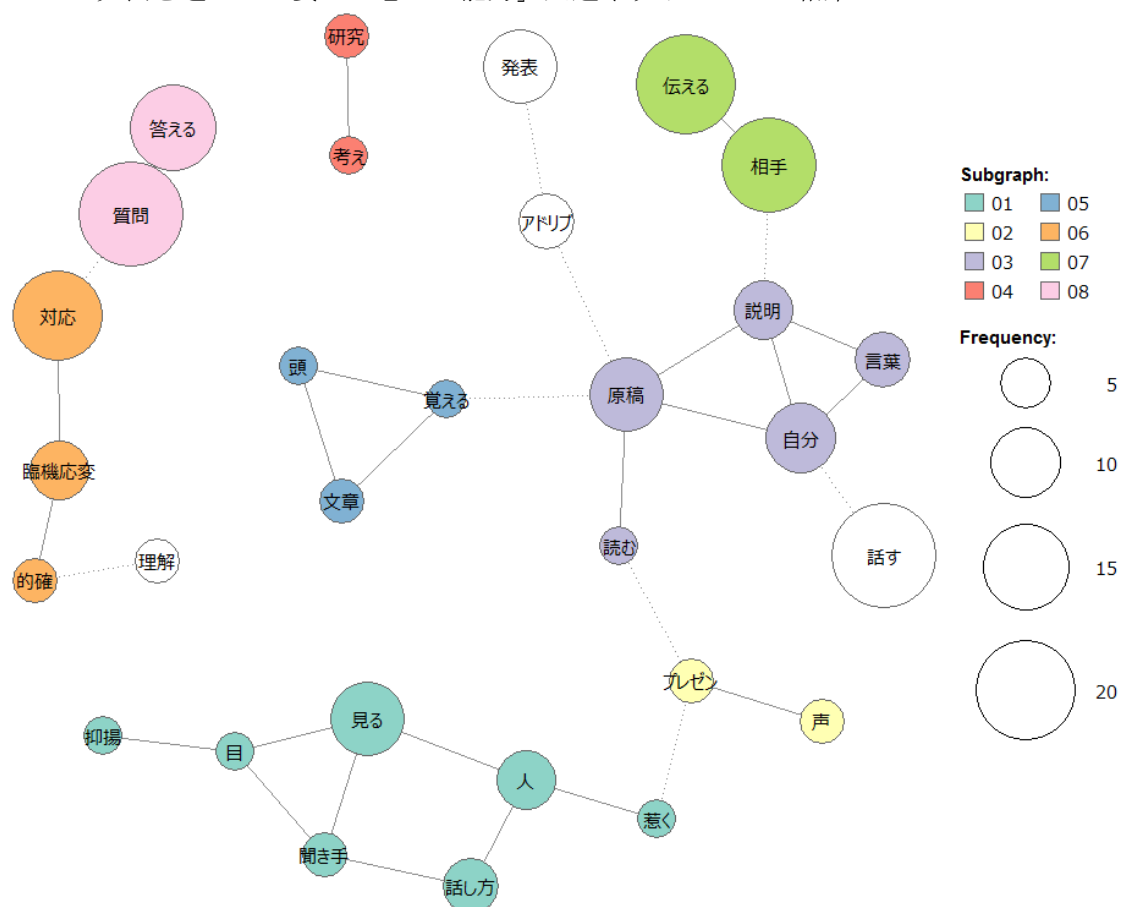
仮設「ア」の（２）で用いた発表会後のアンケートを用いて、仮設「イ」の検証を行う。課題研究発表会後の記述式アンケートのうち「（４）発表を通じて必要だと思った能力」の自由記述データについて、テキストマイニングの手法を用いて、分析を行った。【資料 9】については、抽出語の上位 30 語とその出現頻度について記載した。【資料 10】については、出現パターンの似通った語を線で結んだネットワークを描いた。なお、分析にあたっては、出現数による語の取捨選択に関しては最小出現数を 3 に設定し、描画する共起関係の絞り込みにおいては描画数を 30 に設定した。資料 7 に示した語の共起関係をもとに、分析者が特徴的な記述のまとまりと判断したものを『 』の中に項目として立てて、生徒の記述を“ ”内に記載する。

【資料 9】令和元年度文科第 2 学年 150 名 2 月課題研究発表会後のアンケート 記述式項目「発表を通じて必要だと思った能力」の抽出語上位 30 語

順位	語	頻度	順位	語	頻度	順位	語	頻度
1	質問	22	11	自分	10	21	プレゼン	4
2	話す	22	12	表現	8	22	研究	4
3	伝える	20	13	人	7	23	声	4
4	コミュニケーション	18	14	説明	7	24	的確	4
5	相手	18	15	臨機応変	7	25	文章	4
6	対応	16	16	アドリブ	6	26	聞き手	4
7	答える	15	17	言葉	6	27	理解	4
8	見る	11	18	話し方	6	28	スピーチ	3
9	原稿	11	19	緊張	5	29	覚える	3
10	発表	11	20	人前	5	30	考え	3

生徒の記述から「能力」、「研究」を除外して前処理したのち、Waad 法、距離 Jaccard で分類

【資料 10】令和元年度文科第2学年 150 名 2月課題研究発表会後のアンケート 記述式項目
「発表を通じて必要だと思った能力」共起ネットワークの結果



【資料 10】の左側には、「質問」「答える」の内容からなるまとまりが見て取れる。さらには「臨機応変」などの語もあり、これは『質問対応力』を表していると考えられる。具体的には、“質問されたらすぐに答える力”“質問にわかりやすく答える力”などが多くみられた。平成 30 年度では『表現力』が一番上位であったことと比較しても、ポスター発表または口頭発表時の表現力が必要であることはもちろんであるが、質疑応答部分で必要とされる力にまで言及しており、本校の課題研究が一步踏み込んだものへと変化を遂げていることが推測される。また、【資料 10】の「相手」「伝える」の内容からなるまとまりが見て取れる。これは『伝える力』であると考えられる。“相手が知らないことをわかりやすく伝える”“思いを適切に伝える力”などが多くみられた。生徒たちは 2 度の発表会を経験して、「聴衆」を意識することができるようになっており、「内容をただ伝えるだけ力」ではなく、「相手に理解してもらえよう、伝える力」が必要であると気づくことができたと推測される。今後は、課題研究の授業の中で、生徒たちの『質問対応力』や『相手に理解してもらえよう、伝える力』をより伸ばしていけるように、授業プログラムを構築していく必要があると考えられる。

（3）「アクティブラーニング型の学習法」の実践

仮説「イ」で述べられているとおり「幅広い知識・教養を身に付け、物事を幅広く考えたり、論理的に考えたりすることができるようになり、生徒の自己表現力を含めたプレゼンテーション能力やディスカッション能力を育成」するための教員の取組みとして、①課題研究と②課題研究以外の教科指導という視点から検証する。

①課題研究

今年度から課題研究対象生徒が倍増したことから、本校 SSH 研究開発委員会（以下、SSH）と共同し、課題研究における研究促進ツールを開発し、授業へ積極的に導入した。これまでも適宜 SSH

と SGH 研究開発委員会（以下、SGH）で情報交換は行っていたが、定期的に会議を開くなどのことは行われていなかった。今年度より、SSH と SGH の課題研究開発チームが定期的に会議を行い、共通して使用すべき教材について検討した。その中で、研究をまとめるために用いる「研究の骨子」や、研究を「根拠、論拠、主張」の視点から捉える「三角ロジックワークシート」や、個人論文執筆に向けた「論文の構造ワークシート」などを使用した。このような研究促進ツールを用いて、生徒たちと課題研究担当教員が対話することにより、論理力を育成することができるようになってきている。この試みは、SGH 指定終了後も続いていく課題研究授業について、教員にとってもできるだけ負担が少なく、どの教員でも授業を担当することができる、持続可能なものへとするための第一段階であった。一方で、やはり文系・理系で同じワークシートを使用する際には、文系に当てはまるが理系では当てはまりにくいような内容もあったので、今後は教材に関して授業後のフィードバックを綿密に行い、共通したエッセンスを持ちながら、それぞれの系統にふさわしい教材を作成していく必要がある。また、どの教材をどのタイミングで用いるのかについてさらに検討する必要がある。

②課題研究以外の教科指導

仮説「イ」の「アクティブラーニング型の学習法」を課題研究の授業のみならず、教科の授業にも取り入れている。本校では、昨年度にアクティブラーニング委員会を設置し、学校全体として「アクティブラーニング型の学習法」を推進しており、職員会議を利用して「主体的で対話的な深い学び」について理解を深める研修を行っている。今年度は設置していないが、全教職員が「主体的で対話的な深い学び」ができるよう、各授業で工夫されている<〇〇参照>また、今年度より、生徒が行う教員に対する授業評価項目に、「（この先生は）生徒が自ら考えたり、黒板等を書いたり、発表する機会を取り入れている」を追加しており、各教員が教科指導の中で、ペアワークやグループワークを通じて、生徒たちが相互に対話し、思考し、問題解決をしていく方法を取り入れている。

（４）今年度の実績を用いた検証

- [2 年] ・ [VISION 3 , 4] SmoothSpace を活用し、JICA 東京職員と研究交流
- ・ [VISION 2] 小学校にて、洋上風力発電の有益性について出前授業
- ・ [VISION 4] マンダム・豊田鉄工・エースコック・ヤンマー・HIS やハラルジャパン協会と連携し、研究を深化

- [1 年] ・ JICA 国際協力中学生・高校生エッセイコンテストにおいて、独立行政法人国際協力機構 関西センター 所長賞

※企業・大学や研究機関と連携したフィールドワークを取り入れた課題研究は、本校の特色となっている。生徒は専門家の人々からお話をうかがうことにより、普段の学校生活の中では知りえない知識、視点などを獲得することができている。

第４項 今年度の取組 ～研究開発の仮説と検証「ウ」～

仮説「ウ」の「英語力として、TOEFL65 点以上、GTEC650 点以上、を取得することができれば、大学院留学生、交換留学生、交流学生等とできる限り多くディスカッションを行うことができる。」について、考察する。今年度の豊高グローバルスタディーズの参加者に対して、4 月と 2 月にそれぞれ TOEFL Jr. STANDARD テストを実施し、英語力の変化を測定した。ただし、TOEFL Jr. STANDARD テストは最低点が 600 点、最高点が 900 点と、伸びを測るには分かりにくいので、最低点が 0 点、最高点が 100 点に換算をして測定を実施した。

4 月、2 月における TOEFL Jr. STANDARD テストの結果

スコア	4 月	2 月	増減
第 1 学年平均	59.1	70.8	+11.7
第 2 学年平均	72.6	87.5	+14.9

表より、1・2 年生の 4 月平均点が 65.8 点、2 月平均点が 79.2 点と、約 **20.3%アップ**した。

今年度は木曜日の放課後に、様々な英語のプログラムを実施したため、生徒が楽しく英語力をつけていったと考えられる。例えば、英単語クイズ、英文の暗唱、英語を用いたゲームや準備型ディベートなどである。また、各自でテーマを設定し、英語でのプレゼンテーションを行うなど、活動の幅を広げた。《詳細は第3部第3章豊高グローバルスタディーズを参照》

第5項 今年度の取組 ～研究開発の仮説と検証「エ」～

仮説「エ」の「海外でのフィールドワーク、学校訪問、インターネットなどを活用して海外の生徒との交流や共同研究ができれば、よりグローバルな視点に立った課題を設定することができる」について、（１）海外の生徒・学生との交流（２）国内での学校交流の２点から考察を行う。

（１）海外の生徒・学生との交流

本校のインドネシアへのフィールドワークは３回めとなり、一昨年の反省点をふまえながら事前学習を設計した。まず、参加者が各テーマについて個人で調べ、班で共有し、参加生徒全体で学び合い、現地で英語によるプレゼンテーションができるようにするという目標を設定し、毎週事前学習を実施した。《詳細は第3部第4章海外フィールドワークを参照》また、昨年度までは１年生のみの参加であったが、今年度は２年生が多く参加したこともあって、課題研究Ⅰで学習している手法を１年生に伝えるという相互学習のスタイルがみられた。帰国後、SGH 課題研究発表会において、インドネシアフィールドワークで学んだことを整理し、ポスター発表を行った。２年生と１年生が協働して、このような取組みができたことは大きな成果であり、課題研究の授業においても、２年生が自ら学んだことを１年生に伝え、ともに学ぶスタイルは汎用していくべき形と考えられる。

【資料11】は先述のグローバルマインドセットのアンケートの結果を、海外フィールドワーク参加者１年生と第１学年全体を、参加者２年生と第２学年全体で比較したものである〔２月実施分〕。

【資料11】「豊高型グローバルマインドセット評価のループリック」設問（11～13、23～24）

番号	設問概要	①FW生	1年全体	差分	②FW生	2年全体	差分
11	世界の文化等への関心	3.90	3.70	0.20	4.00	3.70	0.30
12	世界に通用する教養	3.70	3.70	0.00	3.50	3.60	-0.10
13	外国についての知識の活用	4.10	3.60	0.50	4.00	3.60	0.40
14	世界の事象についての論議	3.90	3.20	0.70	3.80	3.20	0.60
23	大学・大学院の留学	3.10	3.00	0.10	3.10	3.10	0.00
24	海外での職業選択	3.90	3.10	0.80	2.90	3.10	-0.20

第１学年では、ほとんどの項目で全体と比べて、高い数値となっている。特に番号24「将来、外国で働くことも視野に入れて職業を選択したい」が高い数値となっている。これは元々フィールドワークに参加する生徒は海外志向が強い生徒である可能性もあるが、海外を実際に体験することで、海外で働いてみたいという意欲を高めると考えられる。また番号13「外国人と交流する機会があれば、その国の文化について自分が知っている知識が正しいかどうか確かめてみたい」、番号14「世界の出来事がもたらす経済的・政治的・文化的・社会的影響について、他者とディスカッションしたい」も高い数値となっており、海外の人々と交流し、新たな発見をしたことが関連していると考えられる。また、第２学年についても、全体と比較して番号13、14や番号11「世界各地の異なる文化、歴史、地理、社会に強い関心を持っている」が高い数値となっている。これらのことから、本仮説の「課題を設定する」ことにまで明らかにすることはできないが、少なくとも、海外でのフィールドワークは、「グローバルな視点」の獲得に大きく寄与し、その視点から、課題を設定するために海外の人々とディスカッションしようとする姿勢や態度の醸成に関連していると考えられる。

一方、第２学年のフィールドワーク参加者では、数値の下がった項目もあった。第２学年では、経験が増えるほど、学ばなければならないことが多いと気づき、このような数値になっていると考えられる。今後の課題としては、学ばなければならないことが多いと気づき、困っている生徒に対して、自ら課題を見つけ解決していけるような、より深い学習ができるような工夫が必要である。

（２）国内での学校交流

今年度は本校のスムーズスペース（遠隔授業システム）の活用を拡大し、大阪府立豊中高等学校能勢分校と課題研究の VISION 2 の 1 班が発表・質疑応答・意見交流を実施し、高校生フォーラムに向けて、発表のリハーサルを行うなど、発表会に向けて相互に評価し、改善し合った。また、豊高グローバルスタディーズの参加生徒も能勢分校留学生と交流し、それぞれの国のことについて理解を深め合った。また、他校とディベートの試合を行い、互いに切磋琢磨することができた。2 月の課題研究発表会に能勢分校も参加し、「間伐材の可能性」「高校生の主張～ドイツから学ぶ未来の能勢～」「パーマオイル需要の急増」をテーマにポスター発表を披露した。3 月には宮崎・熊本フィールドワークの一環で宮崎県五ヶ瀬中等教育学校の生徒と交流したのち、町おこしでアクションを起こすことの重要性を学ぶ予定である。国内外を問わず、学校交流では生徒、教員ともに、他校の取り組みや生徒たちに直接触れることができ、いつも新しい学びがある。指定後 5 年間で紡いできた関係を今後も大切に、関係を継続していきたい。

第 2 章 令和元年(2019)度 SGH 事業のまとめ

第 1 節 今年度の課題と実践の工夫

本年度の課題は、以下の 3 点であった。

- ① VISION ごとの達成目標の明確化と共有したうえで、各 VISION を横断的に結びつけ、一つのチームとして捉えること
- ② 生徒に身に付けさせる資質・能力の数値化による目標設定と達成へ取り組むこと
- ③ 効果的・効率的な課題研究の指導モデルを提供すること

①に関しては、課題研究授業に向けて教員で話し合う会議を、課題研究担当者全員が参加する会議へと変更し、各 VISION で取り上げるべき目標を常に会議の際に確認した。その上で、本校の「欧米中心の「グローバルスタンダード」にとらわれない、日本とイスラームから新たなビジネススタンダードモデルを構築し、企業への提案や起業を行い、イスラーム世界のビジネスリーダーを育成する」という目標に近づけるために、年度当初の早い時期に「ビジネスプラン」についての講義を全 VISION に取り入れた。その結果、その後の研究において実際に店舗とコラボレーションする班やロハスフェスタに出店し、仕入れから販売まで行う班や、高校生ビジネスプラングランプリにエントリーする班が出てくるなど、一つのチームとして目標に近づくことができた。一方で、その他の班は、ビジネスという実践的なレベルに到達することができておらず、到達レベルの均質化が課題として考えられた。また、ロハスフェスタ出店や高校生ビジネスプラングランプリにエントリーした班の研究においても、書籍および論文による裏付けが少なかった。均質化とともに、研究が進んでいる班に対する発展的学習をさせる工夫が必要となってくる。

②に関しては、マインドセットの各項目内容を再検討しなおし、各目標に対するモデルとしての項目設定を再度行った上で、課題研究授業を受ける前の得点を基準として、受けた後での各項目の得点の向上をめざした。1 年生においては、国際的な事象に対して自らが、どのようなことができるのかなど、国際的な問題に立ち向かう意欲・態度を醸成できるようなプログラムを開発していく必要がある。2 年生においては、フィールドワークを活用した課題研究は異文化を理解するうえで有効である可能性が高いことが示された。

③に関しては、今年度から本校の SSH 研究開発委員会と共同で進めた。その結果、「研究の骨子」をはじめ、さまざまな研究促進ツールを開発し、授業で使用した。これらのツールを使用することにより、生徒は研究を整理することができるとともに、教員にとっても各班の進捗状況や主張が可視化することができ、焦点が絞られた議論ができるようになった。このような議論により、思考力・コミュニケーション能力を向上させることができる。一方で、文系・理系「共通の」ツールとして使用しやすいものに改訂を加えていく必要がある。

第 2 節 次年度以降の方針

《第 1 部 研究開発完了報告 8（7）参照》